

琵琶湖・淀川流域図

- 黄色 —: 淀川水系流域界
 赤色 —: 淀川水系給水区域
 緑色 —: 府県境界
 青色 —: 主な河川

衛生画像: 株式会社写真化学

河川
基金

公益財団法人河川財団
 による河川基金の助成
 を受けています。

一般社団法人近畿建設協会による
 「地域づくり・街づくり支援事業」の
 支援を受けています。

助成: 公益財団法人河川財団・一般社団法人近畿建設協会

後援: 国土交通省・文部科学省・環境省・滋賀県・京都府・大阪府・琵琶湖淀川流域圏再生推進協議会・公益社団法人日本河川協会・公益財団法人リバーフロント研究所・一般財団法人河川情報センター・NPO法人自然体験活動推進協議会・報道各社

協賛: 公益財団法人琵琶湖・淀川水質保全機構・NPO法人水政策研究所・株式会社ボードイースト・ニーズサービス株式会社・共和コンクリート工業株式会社・株式会社東京建設コンサルタント・八千代エンジニアリング株式会社・琵琶湖汽船株式会社



表2

目次

はじめに 2

開催趣旨 2

プログラム 2

受付、パネル展示 3

開会式 3

開会宣言 3

開会挨拶 3

主催者挨拶 4

開催地歓迎挨拶 4

祝辞 5

基調講演 6

活動事例発表 9

分科会 12

第1分科会(防災) 12

第2分科会(環境) 15

第3分科会(親水) 18

第4分科会(文化) 21

第5分科会(連携) 24

全体会 27

分科会の結果報告 27

大会宣言 29

閉会式 30

閉会挨拶 31

懇親会 31

エキスカーション 32

プレエキスカーション 32

琵琶湖コース 35

京都コース 38

大阪午前Aコース 41

大阪午前Bコース 44

大阪午後コース 47

振り返りと申し送り等 50

実行委員会・運営委員会名簿 53

RACの発足の経緯と全国大会 54

表3

川に学ぶ体験活動全国大会の開催経緯

川に学ぶ社会を全国各地に広めることやRAC会員の交流等を目的に開催しています。平成10年度から平成12年度までは国主導で実施されてきましたが、平成13年度からはRACの構成団体を事務局とし、民間主導により毎年全国各地で展開しています。開催地域の特色を活かしながら、全国各地の団体による事例紹介や分科会、体験プログラムを入れた活動を実施しています。大会を通じて開催地域の河川活動に学ぶことも楽しみの一つです。初期の共通テーマであった「魅力ある川づくり」「正しく広範な知識・情報の提供」「川に学ぶ機会の提供」「主体的、継続的な活動のために」の4つのテーマを継承しつつ、RACの5つの活動理念をクロスさせて実施しています。

開催年		開催地(メイン会場)	河川・流域
平成13年	第1回大会	岡山県岡山市	旭川
平成14年	第2回大会	福岡県北九州市	紫川
平成15年	第3回大会	徳島県徳島市	吉野川
平成16年	第4回大会	福井県武生市	日野川
平成17年	第5回大会	福島県会津若松市	阿賀川
平成18年	第6回大会	東京会場	
平成19年	第7回大会	岐阜県岐阜市	長良川
平成20年	第8回大会	熊本県熊本市	緑川、白川、球磨川、菊池川
平成21年	第9回大会	広島県広島市	太田川
平成22年	第10回大会	鹿児島県薩摩川内市	川内川
平成23年	第11回大会	神奈川県横浜市	鶴見川流域
平成24年	第12回大会	岩手県盛岡市	北上川流域
平成25年	第13回大会	新潟県見附市	信濃川流域
平成26年	第14回大会	宮崎県延岡市	五ヶ瀬川流域
平成27年	第15回大会	北海道ニセコ町	尻別川流域
平成28年	第16回大会	大阪府寝屋川市	琵琶湖・淀川流域

はじめに

平成28年9月3日(土)、4日(日)に開催された第16回川に学ぶ体験活動全国大会in琵琶湖・淀川流域圏は、全国各地から多数の参加者を迎え盛会裏に終えることができました。

これもひとえに皆様の熱意とご協力の賜物と感謝いたします。ここに、本大会をふりかえり、報告書をまとめました。報告書には開会式、基調講演、事例報告、各分科会、全体会、各エクスカーション等を概ね3ページずつにまとめていますが、より詳細な情報については、RACのホームページに掲載させていただきますので、ご参照いただけると幸いです。

開催趣旨

川に学ぶ体験活動は、「川での活動を通じて、人間性の回復や水環境の保全についての認識を広げていく」ことを目的とし、また、子どもたちに「川の楽しさを伝え、川を大切に作る気持ちを育て、人と人のつながりを創り、文化・社会を創造し、川の力・危険性を理解して安全への意識を高める」場として全国各地で実施しています。

その成果を学び継承する「川に学ぶ体験活動全国大会」は今年度で16回目となり、琵琶湖・淀川流域圏において「暮らしと川の共生～今、私たちに何ができるだろう～」を大会テーマとして開催します。

近畿地方の大阪府・京都府・滋賀県では初の大会開催となりますが、この流域には古代から都市「難波の宮・平安京・大津京等」が形成され、独自の歴史・水文化や河川環境を育むとともに、併せて各都市も流域の恩恵を受け拡大・発展してきた歴史があります。

しかし、昭和の高度成長期の都市化の進展等で、洪水のポテンシャルの増大や都市の排水等による河川環境の悪化が進み、自然環境に脅威となりました。

これらの問題解決のために河川環境保全・適正な利活用の回復に向けて、全国に先駆けて「淀川環境委員会」が設置され、学識者などによる長年の調査・検討・議論を重ね提案し、それを受けて様々な河川整備事業が実施されてきました。また、全国初の「河川レンジャー制度」も作り、河川と地域の人たちの連携・交流を目的とした活動が進んでいます。

これら先進事例や河川整備の事例を全国に発信し、さらに若手の川の活動指導者育成を図り、「川に学ぶ社会を目指して」に寄与することを目的に、「全国大会」を開催します。

プログラム

1日目(9月3日(土))

午前の部 寝屋川視察プレエクスカーション

午後の部 摂南大学寝屋川キャンパス

パネル展示、開会式、基調講演、活動事例発表、分科会、全体会、懇親会

2日目(9月4日(日))

エクスカーション

琵琶湖コース、京都コース、大阪午前Aコース・Bコース、大阪午後コース

受付、パネル展示(11号館11階スカイラウンジ)

1日目のメイン会場(摂南大学寝屋川キャンパス)では、12時半から11号館11階スカイラウンジにおいて受付を行い、約200名の参加を確認しました。

また、受付横に、国土交通省近畿地方整備局、琵琶湖・淀川流域圏内の各事務所、並びに寝屋川水辺クラブ、やましろ里山の会から約40枚のパネルが展示されました。

開会式(13:00～ 5号館5階551号室)

司会進行:摂南大学理工学部都市環境工学科准教授 石田 裕子氏

本大会には、NPO法人川に学ぶ体験活動協議会代表理事、寝屋川市副市長、国土交通省近畿地方整備局河川部長、摂南大学学長及び各界からのご臨席を賜り開催の運びとなりました。

開会宣言

第16回川に学ぶ体験活動全国大会運営委員長(RAC理事) 辻山 正甫氏

参加者全員で「エイ、エイ、オー」の力強い発声で「第16回川に学ぶ体験活動全国大会in琵琶湖・淀川流域圏」の開会が宣言されました。

開会挨拶

第16回川に学ぶ体験活動全国大会実行委員長 澤井 健二氏

台風の接近の中、多数お集まりいただき、ありがとうございます。淀川に面した摂南大学、寝屋川という川の名前の付く寝屋川市は全国的に注目されるようになりました。東北、北海道で台風の被害、熊本での大きな災害、復興も十分ではない中での開催、各地の応援をしていきたいと思います。

1年前の9月3日に、来年の全国大会を近畿でできないかと連絡を頂きました。2000年に「川に学ぶシンポジウムin近畿」の際には副実行委員長をさせて頂いたことがあり、絶好のチャンスと思い、喜んでお引き受けさせて頂きました。しかし1年の準備期間はあっという間でした。みんなで議論した中で、「淀川・琵琶湖流域圏は文化の発祥の地、人が長く関わり続けた地域、それを未来へどのようにつなぐのか」となりまして、大会タイトル、分科会を設定しました。全体のテーマは「暮らしと川の共生 今、私たちに何ができるだろう」、第1分科会は「防災」、第2分科会は「環境」、第3分科会は「親水」、第4分科会は「文化」、第5分科会は「連携」と、欲張ったテーマを設定しました。明日のエクスカーションは3つの府県にまたがって現地での体験をして頂きます。

今日の会場には、実行委員の橋本さん直筆の横断幕と、舞台には、日野川水辺の会のメンバーが、淀川、宇治川の河川敷から採取したものを飾り、また京都のやましろ里山の会からは、竹蛇かごの実物見本の展示など、会場の配置や展示には色々ご尽力を頂きました。

また、今回は摂南大学の学生50名にも色々協力を頂きました。

皆様には、2日間安全で充実した大会をお過ごしいただきたいと思っております。



P4

主催者挨拶

NPO法人川に学ぶ体験活動協議会代表理事 久住 時男氏

ようこそ、琵琶湖・淀川流域圏にご参加ありがとうございます。昨年度はニセコで開催しました。本大会開催にあたり、委員長を含めて、委員会の皆さまにご苦勞があったと思います。それぞれの活動報告を学び、各地域の活動に活かして頂ければ幸いです。NPO法人川に学ぶ体験活動協議会は国の認定を受けた川の指導者養成団体です。これまでに4千人以上が認定を受けました。各地でRACの指導者、トレーナーの皆さまが活躍しています。新潟の見附市では、被災地の現場で何がどのぐらい、いつ必要か、届けさせていただいた被災地の子供を受け入れてキャンプをしようということも伺い、国の活動も受けて、人材が育成されております。また、水難事故を防止するために、認定のライフジャケットの普及活動もしています。防災スクールではRAC指導者が活躍し、資格を持った方が活躍できることは良いことだと思います。全国で川の魅力を、故郷の魅力を訴えて頂ければありがたいと思います。最後に関係者の皆様に変感謝を申し上げます。

開催地歓迎挨拶

寝屋川市長 北川 法夫氏（代読 副市長 戸上 拓也氏）

200名の方がご参加とのこと、寝屋川市にお越しいただきありがとうございます。市長のメッセージを紹介させていただきます。本日ここ摂南大学において開催されること喜びとお祝いを申し上げます。近畿圏で初となる大会を寝屋川市で開催されること、有り難くお礼申し上げます。全国大会は、川に学ぶ社会を構築するために、国の答申を受けて、平成13年度から民間が中心に開催しているとお聞きしています。寝屋川市における取組について。本市の寝屋川は市中心部を流れている典型的な都市河川。水害に苦しみ、水害も悪化の一途をたどっていましたが、水質も改善し、様々な水辺の生き物も復活してきました。コンクリートや矢板で人が遠ざかってきましたが、平成17年にせせらぎ公園が完成し、維持管理に市民が主体的に参画して頂いています。川に学ぶ社会の最初のモデルになったと考えています。幸町公園、市内の水路においても、行政や市民、学校が一体となって活動を進めています。今大会にご尽力頂いた皆様に感謝致します。また、「暮らしと川の共生、今、私たちに何ができるだろう」の大会テーマで、皆様方が講演、活動報告、分科会等を通じて、より一層連携を深め、活動されますよう、お祈りいたしますとともに、お祝いの言葉とさせていただきます。

P5

祝辞

国土交通省近畿地方整備局河川部長 井上 智夫氏

河川行政の推進では大変お世話になっています。大会の開催では関係者のみなさまへ御礼申し上げます。淀川は皆様の生活を支えている重要な川で、寝屋川、各支流、琵琶湖も人々の生活を支えてきていますが、時おり暴れます。支流の桂川では洪水が発生して、堤防が決壊するところでしたが回避できました。東北、北海道の水害では14名の方がなくなっています。防災の面から考えていくことも必要です。水害による年間の死者数は10から100名に減少していますが、さらなる防災減災を考えて、水防災のBCP（事業継続計画）に取り組んでいます。水難事故を調べてみたところ、昨年度の発生件数は1450件。791名がなくなっている。川でなくなった方は235名のうち、23名が中学生以下の子どもです。この活動を通じて、将来の世代を担う子どもを育成することも必要ですが、死者の9割以上を占めている大人達がお手本を示すことが必要と感じています。RACがライフジャケットの推進をしている話をお聞きましたが、国土交通省としてもライフジャケット着用に積極的に推進していきたい、まずは気軽に簡単に事故を防げる「ライジャケオン」を考えております。全国が安全な河川になるように国土交通省としても頑張って取り組んでいきたいと思います。皆様におかれましても、これからも全国の管理者の皆様と共に様々な活動をされているかと思われませんが、引続き現場での河川活動に対し皆様の活動を支援させて頂きたく思いますと共に、皆様方の絶大なご協力を賜りまして全国の河川が安全な河川になるように取り組んでいきたいと思います。本日、川に学ぶ体験活動全国大会の開催、まことにおめでとうございます。



来賓紹介

司会者

ご来賓の方には他に、摂南大学学長八木紀一郎様、大阪工業大学特任教授綾史郎様、同志社大学大学院教授新川達郎様、淀川河川事務所長桑島偉倫様、近畿地方整備局広域水管理官森田宏様、RAC副代表理事藤芳素生様、RAC常任理事金沢緑様でございます。

基調講演(13:30～ 551号室)

司会進行:運営委員長 辻山 正甫氏

演題:淀川生態環境の目指すもの

講師:大阪工業大学特任教授 綾 史郎氏

講師プロフィール:

昭和24(1949)年倉敷市生。大阪工業大学特任教授(工学部都市デザイン工学科水圏環境研究室)、博士(工学)、専門:水圏環境。淀川環境委員会委員、イタセンバラ研究会会員。淀川水系イタセンバラ保全ネットワーク会長。

講演概要:

パンフレットに掲載されている写真はワンドで、大学の上から撮った写真。本流と堤防の間に池のような状態があるのがワンドで、最近つくられたもの。

淀川と環境問題について

イタセンバラや淀川の生物からみた淀川の環境問題として、1970年代までさかのほらないと淀川の環境問題が見えず、イタセンバラは1960代に確認されない時期があり、絶滅したのではないかと心配されていた。主な理由としては淀川水系の水質汚濁。13号台風の60年前の台風。当時の建設省が淀川洪水計画を立て直し。1969年に赤川のワンドで8年ぶりに発見された。淀川水系工事基本計画が策定される時期。イタセンバラが確認できない時期に保護運動が活発になっていた。その中心となったのは、淡水魚保護協会。孤軍奮闘。日本生態学会が全面的に支援する。イタセンバラを支援する。1964年に淀川問題検討委員会設立。1953年に淀川の最後の本川の堤防が切れた。利水と治水との綱の引き合い。その間にどうなったか、1997年に河川法が改正され、河川環境の保全が加わった。河川事務所が環境事業に積極的に取り組むようになった。淀川の環境委員会発足。淀川河川事務所がやってきた環境修復事業。

2006年にイタセンバラがいなくなった。淀川の生態環境を一緒に考えてきたのに、イタセンバラがいなくなってしまった。直接の原因は外来種による捕食。その対策を含めて現在までに至っている。1993年に域外飼育が始まっていたので、これまでに3回淀川に再導入してきた。

琵琶湖・淀川水系について

日本で最大で最古の湖。400万年。もともと湖なので、水が止まっている止水域。普通の川は流水域。大きな湖が最上流にある。琵琶湖はプランクトンが発生する。淀川は、琵琶湖で発生したプランクトンが供給される珍しい河川。プランクトンを食べる生き物が発達。昭和の初めに干拓されたが、巨椋池があった。大阪平野全体が淀川の氾濫原といわれるが、大都市圏の中の二次的自然。北海道の釧路湿原も似たようなところ。ヨシハラで牧草地。大阪、京都、奈良が流域にあるので、人と流域のかかわりが強かった。淀川だけ市街地の中に緑のか細い線が残っている。生息している魚の数が多く、淡水魚が80種類ぐらい。止水と流水に住む魚が両方住んでいる。ほとんどの種がワンド、たまりに生息している。貴重種はオオサンショウウオ、イタセンバラ、ミナミミヨはかつて書きだが、淀川本川にいる魚ではなく、湧水のあるところにいた魚で、絶滅した。貴重種、固有種がたくさんいたが最近では減ってしまった。

ワンドについて

そもそもワンドとは何かというと、昭和35年ぐらいまでは、今の国道事務所と同じで、河川の航路を維持するのが淀川河川事務所の大きな仕事の一つ。生物的にはどのような意味を持っているのか。市街地になって行き来が出来なくなってしまった。ほとんどが市街地に入ってしまった、その代償がワンド。ここにたくさんの生物が生息して豊富な植物がはぐくまれていて、67種のうち、9種以外はワンドで発見された。ワンドがなくなると生活が厳しくなる。

イタセンバラについて

シンボルフィッシュ。秋産卵のタナゴ。淀川水系の、琵琶湖水系に生息している。2006年から2009年に淀川水系からいなくなった。



アユモドキについて

最後の生息地が京都にある。急激な水位上昇があると産卵する。

2000年以降の魚の種類

10年ごとに調査。1970年代には35種類。2004年には31種。在来種が減り、外来種が増えた。90パーセントがブルーギル。イタセンバラがいなくなった。

外来種の駆除対策

・外来種の嫌いな水環境をつくる。

・浅水型ワンドづくり。

・維持管理が大変。

・1日に80キロ駆除してきた。最近はそんなに多くない。

・75%→38%→15%→20%のところまで外来種を抑えられている。

・浅いところには在来種が多い。何もしないと、50~60%が外来種になる。努力をすると、在来種の割合をふやすことができる。

・城北ワンドでは、人手をかけないと、イタセンバラを保護できていない。

・イタセンネット。シンボルがないと今以上に淀川を守ることができない。

・生態系のトライアングル。天然記念物。どのように対応してよいかわからない。その受け皿としてのイタセンネット。

・月2回の駆除活動を行っている。

・イタセンバラの公開放流。天然記念物の公開放流はやっていなかった。密漁対策で。今では小学生もみんな知っている。ここに来れはいることを知ってほしい。

・今年も稚魚が出てきている。今頃は成魚。

・48個体しか外来種がいなかった。このようにすれば在来種が増えて、外来種が減る。 絶滅危惧種の保護

ヨドゼザラの保護。桂川。掘削しなければならないところに、ワンドをつくった。

・小学生はイタセンバラへの知名度は高い。

・バラタナゴは4月に産卵なので競合はしていない。

最後に自然豊かな川を次世代につなごうという思いで皆様と一緒に続けていきたい。



活動事例発表(14:30～ 551号室)

司会進行 摂南大学理工学部都市環境工学科准教授 石田 裕子氏

各団体との活動状況を共有し、さらに各流域へとよりよい活動につながるために全国各地より4団体の活動紹介と活動報告を行った。

発表1

『小学校での川を使つての授業』東京都大田区立嶺町小学校 篠 政博氏

アユの遡上調査を行い、アユの痕跡もたくさん見えています。綺麗になった多摩川で、中州を拠点として活動をしています。私たち教員が川のことをよく知っている教員ばかりではないため、はじめは多摩川から教員全員で学んでいこうという校内研究を行っていきこうということになりました。

川で遊ぶというのは学習活動にならないが、子どもが学習計画を立てて、子どもが総合的な学習の時間になっています。いわば川がそばの絶好のフィールドで、みんなで授業づくりをしています。

川の専門家を呼んでレクチャーを受けて、RACから安全指導を学ぶ機会をつくりました。2年間の成果として、教科書を教えるのではなく、魅力ある学習を作り上げるという感覚になってきています。授業はドラマを作ること。アクティブラーニングも多摩川の活動からはじめています。

実際の活動についてですが、学年の段階に応じた活動をしています。川に入る活動は保護者の協力のもと安全を確保しながらの体験活動になります。

1,2年生は川に入るだけで感動します。川の中州に行き、石を拾ってみたり、植物をまず観察することをおこなっています。3,4年生になると、年に3,4回生き物や鳥達がどこに棲んでいるかを観察したりするだけではなく、自分たちで課題を決め、飼育、観察の仕方や低学年の子へ生き物の取り方を教え、課題の研究の成果を発表しています。また、高学年になると、上流へ行き川流れ体験をしながら、下流との比較を行います。その際、僕たちの学びということで、映像資料をつくりあげます。

6年生になると下流の干潟に行き、「多摩川博士」となり、自主的に川に携わります。地域の方は川の活動をしていることを知り、今では、近隣の学校からも子供が参加して、毎月1回活動しています。

地域や学校が、多摩川を通して学んでいく。それが重要。川に学ぶということ。

最後に多摩川探検隊の歌が紹介されました。

発表2

『川遊び』玄海グリーン&アドベンチャー共同企業体 西胤 正弘氏

北九州市のシンボルリバー紫川。それを10日間かけてさかのぼって行く事業を行っています。内容としては、22.4キロの紫川、96%が下水道。標高900メートルの山を河口からさかのぼっていきます。

事前研修で装備の使い方、仲間づくりを行い、どのような子供がいるのかをスタッフがチェックします。

実際は、河口からカヌーに乗ってさかのぼって、2日目は紫川をひたすら歩く。食事はスタッフが作り、子どもが食事を食べない時には「しつけキャンプ」になることもある。

P10

子どもとは心と心のぶつかり合い。真剣勝負。それがキャンプの良いところと実感。

5日目は雨の中、少年自然の家到着。子供が食材を集めてスタッフに食事をふるまう。

事後研修として、別の日に1泊2日かけて登山。

11回目。キャンプの中で感じるのは、子どもの抱えている課題。子どもの積極性が欠けている、集団の中で役割を果たせない、知っていることとできることのギャップが大きい。ただ単に川をさかのぼっていくということで、抵抗力を付けていきます。

大人になった参加者から、自分の子どもにも参加させたいと。川には厳しさがある。それが子どもの社会性をつくっていく。川は人をかたちづくっていくところです。

発表3

『淀川管内河川レンジャーの取り組み』公益財団法人河川財団近畿事務所 瀬戸口 泰子氏

河川レンジャーについては、インターネットを通じて河川レンジャーの知名度聞いたら50%ぐらいだったが、川活動に関心のない方に聞くと、まだあまり知られていません。

平成9年に河川法が改正され、地域連携による河川管理が制度化。平成15年から河川レンジャーを具現化する試行。人と川とを再構築する施策。住民参加による河川管理。住民と河川管理者との橋渡し。河川と地域との良好な関係をもつ役割を担うのが河川レンジャー。河川レンジャーアドバイザーは任期終了した人のことで、河川レンジャーアドバイザーが大学生等と一緒にグループ活動する場合はグループレンジャー。

毎年6月上旬に淀川河川レンジャー養成講座を受講して、このような活動をしたいという人にプレゼンテーションして頂き、審査。57名の河川レンジャーが誕生。アドバイザーは20名。レンジャーは現在、出張所ごとに所属してそれぞれに活動しています。レンジャー活動の進め方。川や地域の課題に基づき、活動計画を自ら立案。事務局も行政との意見交換の場をもって、活動計画を作り上げる。運営会議で提出し、その場で評価決定がされる。それによって、次年度の活動を行います。

活動の方向性の共有理解については、20名を超えるレンジャーがばらばらに活動しているが、共通の方向性をもって、地域住民の川活動への参加を促していて、各ステップで共有しています。ステップ1として、経験をつみながら地域住民が活動に参加することで淀川のファンになっていってもらい、川の史跡を巡るツアーや自然観察や川に入るための安全活動を行うための指導も行っています。ステップ2として、地域ニーズを把握しながら行政と連携して、活動。水質検査を行って行政へ。ワンドの外来種の除去も行います。

ステップ3としては、川づくり、人づくりの活動を行います。3千名が集る桂川クリーン大作戦。河川レンジャーから地域団体の構成メンバーの一人へ。

専門家会議について、レンジャー自身も実行委員会で、河川レンジャーとして必要な防災の知識を身につけます。南海トラフ地震への備えを学ぶ研修等を大阪府の支援によって開催しています。

また、新規河川レンジャーの方には、個別に支援を行っています。是非河川レンジャーになりませんか。

発表4

竹蛇籠プロジェクトin木津川 『地域で増やそう河川の生き物』
滋賀県立大学大学院/NPO法人やましろ里山の会 北野 大輔氏

木津川グループ河川レンジャーで小中学生を育てる活動をしています。特徴としては中流下流部、砂河川、河川本

P11

流に生き物の生息環境をつくりたく、治水、利水より河川環境の保全活動をしています。

竹蛇籠とは、1700年代から用いられた工法で活動地域への広がりという意味。真竹、松、石を使用。準備が大変だったのは真竹確保。200本以上の竹を4つに割っていく。

昨年10月に製作。170名が参加。原小組さんが指導。長さ6m、直径45センチ。地元企業の方がボランティアで重機を出していただきました。

最終的には18本6セットを玉水橋から下流へ設置。

どのような生き物が増えたか調査を4月に実施したところ33種類。オイカワ、コケチバスなどの流水性の生き物だけでなく、ミナメダカなどの止水性の生き物まで生息していたとわかり、絶滅危惧種の生息にも役立っています。

プロジェクトの評価として、設置前の魚類は2種類しか見られなかったのが、竹蛇籠周辺に一つの生態系が形成された。河岸の浸食防止も見られるのではないかと期待してすすめています

地域の連携と広がりについては蛇籠自体が170名の全員へ伝統工法が広がりました。



第1分科会(防災)

テーマ :安心・安全な川をめざして

サブテーマ: ～ 伝えよう子どもたちへ ～

話題提供者

- 1.全国 「北九州市紫川の河川防災と活動時の安全管理の事例」
内村 政彦氏 北九州市 NPO法人川塾北九州 代表
 - 2.近畿 「淀川の最新の新たな防災対策の取り組みと事例」長谷川 広樹氏 淀川河川事務所 調査課長
 - 3.近畿 「河川管理者と地域住民の防災コミュニケーションの方法と体制」
吉田 静夫氏 桂川・小畑川水防事務組合淀水防団 団長
 - 4.近畿 「河川の環境保全・体験学習活動時の安全管理」辻川 松子氏 淀川管内河川レンジャーアドバイザー
コーディネーター 柳沼 宣裕氏 桂川流域ネットワーク 幹事・元河川レンジャー
- 分科会担当者 辻山 正甫氏、崎谷 久義氏、吉田 静夫氏、中辻 英克氏、中西 史尚氏、小川 芳也氏、
柳沼 宣裕氏、仁枝 洋氏

ワークショップ第1G担当 崎谷 久義氏 自然にみちた水辺づくりプロジェクト 代表 河川レンジャーアドバイザー

ワークショップ第2G担当 吉田 静夫氏 淀水防団長・NPO法人子どもと川とまちのフォーラム 副理事長

ワークショップ第3G担当 中辻 英克氏 NPO法人ピオトープネットワーク京都 理事長

ワークショップ第4G担当 仁枝 洋氏 桂川流域ネットワーク幹事・河川レンジャーアドバイザー

記録担当 中西 史尚氏 近畿子どもの水辺ネットワーク

記録担当 小川 芳也氏 株式会社近畿地域づくりセンター

アドバイザー 辻山 正甫氏 近畿子どもの水辺ネットワーク 会長 久住 時男様 アドバイザーRAC 代表理事

参加人数 38名

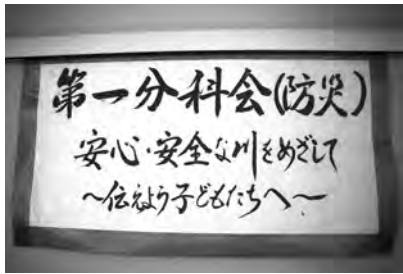
1.開催趣旨

第1分科会では上記のテーマをもとに、「河川体験を行うための安全確保」と川の利用の仕方について、「日常の河川・防災体験について共有する事」を目的としました。そのため全国や近畿の事例報告の後に、ワークショップを行いました。ワークショップの内容は大きく分けて2つあり、「安全な河川利用」と、「防災を軸に、地域との連携や情報・避難」について議論しました。

2.実施内容

話題提供 川塾北九州 内村氏

平成24年の九州北部豪雨で、さまざまな対応をした経験より、災害と向き合う文化についてと、「人は皆、自分だけは安全だと思っていること」などについてを、北九州市が発行した、「生き抜く術(すべ)の心得帳」の紹介とともに報告しました。その後、熊本震災に支援に行った事など、防災を進める上でのRACの役割について報告しました。



淀川河川事務所調査課長 長谷川氏

現在考えられている、淀川での災害対策の動向についての報告がありました。特に今回は、各主体・地域ごとにタイムライン(災害時の時間ごとの防災行動計画)を作り、見直し・修正する必要があるについて述べました。

淀水防団長 吉田氏

近畿の事例として、吉田氏は、淀川沿いの水防団の現状や今後の課題について報告し、水防団の活性化の必要性和、地域社会の理解促進方法について述べました。

河川レンジャーアドバイザー 辻川氏

「わがまち防災スクール」で行っている、小学生対象の防災学習推進についてや、若者が防災普及活動をしている「グループレンジャー」、「防災の国際交流」などについて報告しました。

ワークショップの進行と内容

グループごとに行われたワークショップは、「安全な河川利用」と「地域防災・避難・地域連携」の大きなテーマで、4つのグループに分かれ、情報の共有と議論が図られました。

○各分科会のまとめ

第1グループ 安全な河川利用

無理がない計画、活動地の下見、適正な用具用材、危険予知の感覚をみがく、

生物危害への目配り、気象を読みとく、催し中止の決断、活動ごとの 安全チェック、適切な身づくり、自分の身は自分で守る認識、保護者へ活動趣旨の理解、参加者の属性を理解、起こった時の判断。

まとめ

川への関心を呼びかける。指導者の知識を深める必要がある…ルールに見える化! 事業計画前の下見、直前下見をしっかりと。

今後の課題

今回のような場を多く持つ必要がある。

第2グループ 地域防災

水防団と地域の現状は以下の通り。水防団が無い地域が多い、若い人が不足(学生はババ優先)、体力不足、経験不足(経験させたいが現実的ではない)、新興地域は旧住民の話を聞かない、危機意識が低い、対応のための方法の確立、安全バイアス(安全に対する思い込み)があつて、それを取り除いていきたい、子どもに避難所体験をさせる、越水堤をつくる事で防災力を高める⇒田んぼダム、地域防災の担い手不足⇒ 教育の中に組み入れていくことが必要、スポーツの集まりを利用して人を水防に向けていきたい⇒バケツリレーのように水防リレーのスポーツ化



まとめ 今の子どもたちに(災害・水害の)経験を引き継ぐ地域は、水防そのものではないので(=流域全体を見据えた治水対策はできないので)、自分たちの命は自分たちで守るという考え方が必要。そのためにも、河川レンジャーなどの地域教育・防災指導に期待したい。

第3グループで話し合われた事

避難準備、訓練、ハザードマップ、情報の伝達、避難手段、意識づけ

まとめ

普段から準備、伝える仕組み⇒ 意識づけ話しあった内容をいかに意識づけるか



第4グループで話し合われた事

地域とのつながり、子どもとのつながり、若い人をうまく巻き込む、タイムラインの考え方の普及が必要。

まとめ

地域の川の出来事を伝える。堤防や川の事を伝える。防災訓練。



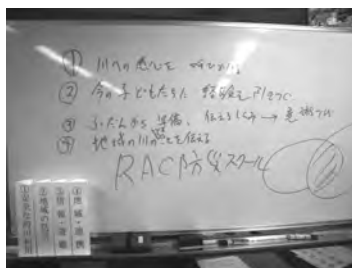
3.分科会の結論

全体の議論として、「現時点の河川利用や防災の課題を、いかに伝えるか」という事と、「過去の出来事をいかに伝承していくか」が課題となりました。また、第1グループの議題であった「行事運営」や「指導者のスキルUP」については、現在の社会では地味な活動となっていますが、今後様々な手を打っていかねばならないという事が課題として残りました。



4.全体を通しての意見

大会の数日前に東北水害が起こり、グループホームの被災の件が大きな話題となりました。特に、第1グループの内容は、「避難」だったのですが、このグループのファシリテーターは過去に水害があった地域の福祉施設職員でしたので、様々な視点から議論がなされました。今回偶然だったのですが、分科会のコーディネーターと各ファシリテーターの5人のうち4人が、普段から川遊びや河川利用の普及をしながら水防団や河川レンジャーをしていました。もともと川と暮らしとの結びつきが強い近畿。いかにして、山・田・川・海をつなぎ、上下流のつながりを再構築するか、私たちの活動が問われています。



お知らせとして、RACの防災スクールの紹介があり、各地域での活用推進について述べられました。

資料 書き込み式アンケート

「教えて、あなたのヒヤリハット体験」

第2分科会(環境)

テーマ: 「川活動は環境保全・環境教育」

サブテーマ: それぞれの宝物を守るために

話題提供者: 名和 あけみ氏 (NPO法人 長良川環境レンジャー協会 副理事長)、
中村 大輔氏 (アイキッズ〜エコアイデアキッズびわ湖〜 指導者)

コーディネーター: 丸井 晶子氏

分科会担当者: 村瀬 りい子氏、吉岡 美佐子氏、山村 武正氏(以上企画・運営)、
野田 晃弘氏(企画・運営・記録)

協力者: 北川 健司氏(RAC理事)、中村 大輔氏(アイキッズ指導者)

参加人数: 40人

1.開催趣旨

日頃私達が川や水環境で行っている様々な活動が、環境に対してどのような役割を果たしているかについて、再確認し、各団体の今後の活動につながるヒントが得られることを期待して、標記テーマでの話し合いを企画しました。環境保全と環境教育の視点で全国と近畿から各1題ずつ話題提供を頂いた後、アンケート結果も交えて話し合いました。

2.実施内容

(1) 話題提供(全国)

「地域の自然環境を守るための環境教育活動とエコリーダー育成」～継続的な水辺の安全教育活動と年間を通してのエコリーダー育成講座の実施～ 名和 あけみ氏(長良川環境レンジャー協会)

長良川環境レンジャー協会は、長良川を中心とした河川の環境保全を図るため、流域の市民、企業、行政と連携しながら、近年は長良川だけでなく木曽川、揖斐川を含めた木曽三川の流域で様々な活動をされています。その中から、子ども達を主に対象とした活動の紹介がありました。

継続的に取り組まれている「自然体験活動を通しての環境教育活動」では、「水生生物調査体験学習会」や「流域小中学校との野外教育活動」、「子どもの水辺安全講座」などがあり、また、「地域で活躍するエコリーダー育成講座(ながらっ子レンジャー自然体験活動)」では川だけでなく、森・山・海にも広げた地域で年間プログラムを実施し、人材育成を図られています。また、昨年、清流長良川の鮎が世界農業遺産に認定されたことを受けて、今年は伝統漁法を学ぶ機会も設けるなど、水辺の活動を通して長良川における人の生活・水環境・漁業資源についても楽しく学ぶ体験活動を実施されています。

これら活動に参加した子ども達は、地域の自然や文化に触れるとともに、人間関係や集団活動のあり方、公衆道徳についての体験も積むことで、地域でエコリーダーとして活躍し始める人も出てきているとのことでした。

(2)話題提供(近畿)

「ふるさとに伝わる湖魚文化を学ぶ体験活動」中村 大輔 氏(アイキッズ〜エコアイデアキッズびわ湖〜)

アイキッズは、市民団体「琵琶湖エコアイデア倶楽部」が、子ども達への環境教育を目的に立上げ運営している

子どもエコクラブで、滋賀県草津市内の小学生10名程度が参加しています。小学校教師の中村さんは、ファシリテーターとして活動に関わっておられます。

かつて琵琶湖周辺に住む人達は、琵琶湖の水を飲み、魚を食べる等、琵琶湖に命のつながりを感じていました。また、ビワマスやニゴロブナなどの琵琶湖固有種の魚料理は他県には無い、貴重な文化として残っています。そこで中村さん達は琵琶湖の恵みを頂くことや湖魚文化を伝えることで、環境学習で学ぶ、見て美しい琵琶湖ではなく、恵みを育む対象としての琵琶湖の大切さを子ども達に実感してもらえないかと考えて、湖魚文化を学ぶ活動を行なってきたとのことです。魚は琵琶湖に行って漁師と触れ合いつつ手に入れ、フナ寿司作りで必要な米や酒は、農家や酒蔵に行きそこで人達の話を聞きつつ求める等、人と人のつながりを大切に活動しており、さらに最後に関わった人達を招待して食文化パーティーを実施し、そこでも意見交流しているとのことです。

アイキッズの指導方針は、子ども達の主体性を重んじ、一方的に答えを教えるのではなく子ども達に気付かせるよう配慮することだそうです。そのために、子ども達を一人一人よく見るとともに、何を学ばせたいか大人で共有しておき、活動終了後のスタッフによる振り返りも重視されています。

子ども達へのファシリテーションのプロである学校の先生と、環境に詳しい活動団体の皆さんと一緒に考え、プログラム作りが進むと、環境教育がさらに進むのではないかと考えているとのことです。

(3) 討論の概要

●学校の先生と一緒にやりたいけれど、先生の方で壁を作られている方がおられたり、先生の異動によりつながりが切れたりするのが問題(市民団体の方)。

●大人も子どもの目線と同じ所に立つことが必要(琵琶湖エコアイデア倶楽部の方)。

●後継者の問題がアンケート結果からもうかがえるが、活動に参加した子ども達の中に後継者が出て欲しいとは思っていない。それより自分に自信をつけて活動して欲しいと願っている。しかし一人一人丁寧に見ていけば、何人かは帰ってきてくれる。そのためには周りの大人のチームワークが必要(中村氏)。

●大学生になって、様々な出会いがきっかけで活動しているが、周りの友達には運営側を誘ってもほとんど乗ってこない(大学生)。

●活動の原動力は、参加した子ども達に喜んでもらったこと。この喜びを皆で共有することが最も大事で、大人の仲間作りにもなる(市民団体の方)。

●学校は子ども達に川に行くと言っているが、教師の私は、そうでもないぞ、注意して入ったら面白いぞと言っている。本当は子どもを川に入れたいと思っている親も増えている(市民団体、教師)。

●「川は危ない」の看板を外すよう管理者に働きかけよう。また、女性トイレを川に作ること、無料貸出し可能なライフジャケットを川に置くことを働きかけよう(市民団体の方)。

3. 分科会の結論・今後の活動方針

第2分科会での話題提供や討論を通してクローズアップされた点は、大きくは下記の三つでした。

①川や水辺の文化継承には、関わる多様な人との交流、伝える側、指導する側の連携、協働、チームワークが重要であるということになりました→大会宣言5に関連

②後継者の問題では、小さいときから川活動に参加してもらうのが大事であり、その意味で体験を通した環境教育は大事だということになりました。しかし、小さいときから活動に参加しても残ってくれる人、運営の側に回ってくれる人は少ないのも現実です。それでも、やはり体験を通じて、感じて、自らが考える機会を持ってもらうことが環境保全に繋がって行くのではないかということになりました→大会宣言4に関連

③近づきやすい川や水辺の整備が必要で、水辺安全講座等の教育とともに、学校や地域での「川は危ない」の看板撤去、子どもやその親が安心して水辺に来られる環境整備が重要となりました→大会宣言3に関連

4. 全体を通しての意見

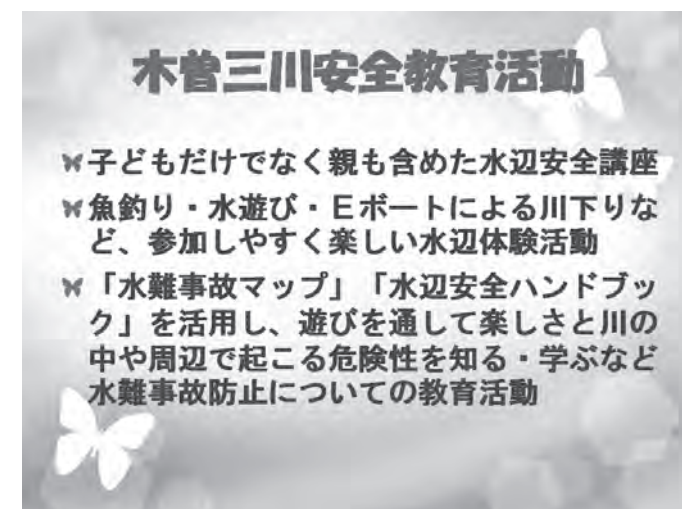
当分科会のテーマにある「川活動は環境保全・環境教育」であることを改めて感じた80分でした。豊かな水辺の自然の回復、子どもが遊んでいる姿が見られる川の復活のためには、分科会で出たご意見等を参考に、実行して行くことが大事であると改めて強く思いました。



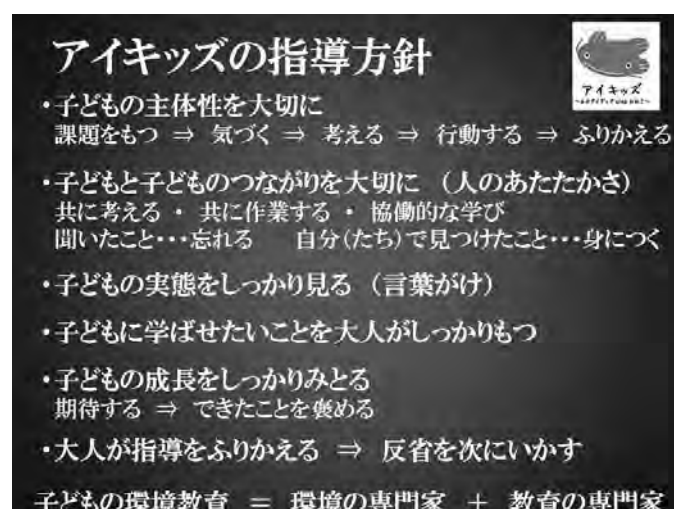
話題提供者(左:名和氏、右:中村氏)



分科会会場風景



名和氏PPTデータより



中村氏PPTデータより

資料

アンケート結果概要(複数回答可の設問への28人の回答結果、単位:%、主な設問項目を表示)

Q. 活動していて困ったこと・困っていること…後継者(39.3) 活動資金(39.3) 地域の理解度(21.4) 行政との関係(21.4) リーダーとなる人材(21.4) 広報手段(17.9) 助言者(3.6)

Q. 活動を通して嬉しく思ったこと・感じたこと…参加者に喜んでもらった(78.6) 地域の活性化に貢献できた(42.9) 新たな発見があった(35.7) 連携の輪が広がった(35.7) 仲間が増えた(32.1) 満足が得られた(25.0) Q. 子ども達に川に関心を持ってもらうために必要なもの…川の魅力を体感してもらえる機会を作ること(78.6) 近付き易い川にする(50.0) 親を引き込む(39.3) 川の清掃活動や環境活動への参加(32.1)

Q. 川活動が環境保全・環境教育に繋がっているか…はい(75.0) いいえ(3.6) どちらともいえない(10.7)

第3分科会(親水)

テーマ:	親水活動を可能とする水辺を自分たちのまちに実現する
サブテーマ:	人と水辺の関係を取り戻す市民公共工事
話題提供者:	横山 大将氏・保川 一治氏(鶴見川流域ネットワーク)、 上田 豪氏(ねや川水辺クラブ)
コーディネータ:	高田 知紀氏(神戸市立工業高等専門学校・都市工学科 准教授)
分科会担当者:	市川 勝巳氏(企画・運営,記録),上田 豪氏(企画・運営)、北村 美紗樹氏(企画)、 竹井 隆英氏(企画・運営)
参加人数:	27人

1.開催趣旨

「川でどのような活動ができるか」ということと、「川がどのような構造であるか」ということは切り離せない問題です。本分科会では、大阪の寝屋川および東京・神奈川の鶴見川流域での川づくりの事例を参考にしながら、「これからの人と水辺空間の関わり方について」というテーマで、会場の聴衆も参加するワークショップを行いました。河川における人びとの多様な活動を展開するための川づくりについても言及しながら、これからの水辺空間と人との関わり、親水を実現しうる水辺空間のあり方を考えました。

2.実施内容

(1)近畿での取り組みの事例報告:上田 豪氏 ねや川水辺クラブ

テーマを「寝屋川市域における川づくり」と題して、ねや川水辺クラブの上田氏が、寝屋川での川とまちを一体としてつくっていく活動の報告を行いました。寝屋川は、淀川左岸地域に位置し、市内の全長約8.4kmのうちすべてがコンクリート護岸で覆われています。かつて水質全国ワースト1になってしまったこともある寝屋川を再生する活動は、寝屋川市制50周年の川のワークショップをきっかけに始まりました。市民が話し合いのもとに寝屋川再生プランを提案し、その後、ねや川水辺クラブの設立と川活動へとつながっていったのです。ねや川水辺クラブは、クリーンリバー作戦や舟運まつり、生き物調査など川に親しみ多様な活動を展開しながら、寝屋川せせらぎ公園、茨田樋遺跡水辺公園などをはじめ、寝屋川に多くの親水空間を実現していきました。親水空間整備では、行政と連携しながら、市民が自ら川のあり方を考え、設計図を検討し、さらにそれぞれの技術で実際に工事まで実施する「市民公共工事」を実践しました。その大きな成果として、40年ぶりに、寝屋川に入って遊ぶ子ども(通称:川ガキ)の姿が見られるようになりました。活動のなかでは「自己決定がやる気を生む!」をキーワードに、市民団体と地域住民および行政が連携しながら、典型的な都市河川に親水活動を可能とする水辺空間を実現してきました。

(2)全国での取り組みでの事例報告:横山氏・保川氏 鶴見川流域ネットワーク

全国での取り組みについては、「流域連携による水辺活動拠点づくり」というテーマで、鶴見川流域ネットワークの横山氏、保川氏が報告を行いました。鶴見川はかつて暴れ川で、たびたび発生する洪水で住民を悩ませていました。その背景には、流域の急速な市街化があり、河川だけの対策では不十分であるとの認識から、「総合治水

」の対策が導入されることとなりました。2004年には、鶴見川流域に含まれるすべての自治体と国交省により「鶴見川流域水マスタープラン」が策定されました。このマスタープランは、市民、市民団体、行政、企業の連携によって推進される体制となっています。流域で活動する市民団体によって組織されるのが、「鶴見川流域ネットワーク(通称:TRネット)」です。TRネットは、流域学校での環境学習支援、流域ツーリズム、環境調査など多様な活動を展開しています。なかでも、鶴見川河口干潟、綱島・バリケン島・カニ島、鴨居左岸高水敷、市が尾水辺の広場、早淵川親水広場など、流域の多様な親水空間の整備や維持管理をTRネットが担っています。鶴見川では、「流域連携主義」の考えのもとに、流域の多様な市民団体がネットワークを構成しながら、行政や企業と連携し、川を様々な形で使いながら維持管理していくことで、親水空間を持続的なものとしています。

3.ディスカッションの内容

後半のワークショップでは、寝屋川、鶴見川流域での事例報告をもとに、市民が自らの手で親水空間を実現するための方法や考え方について、分科会参加者全員で話し合いました。

まず、共有したのが、「流域連携主義」という考えにもとづいて、市民、市民団体、行政、企業が連携することの重要性です。そのなかで、寝屋川、鶴見川の取り組みに共通していたのが、市民および市民団体が企画力・提案力を身に付け、行政や企業に対して積極的に提案を行っている点です。寝屋川の「自己決定がやる気を生む」のキャッチフレーズのように、市民が自分たちの川やまちについて、具体的な提案を考えるなかで、環境をつくることへの当事者意識が芽生えてきます。

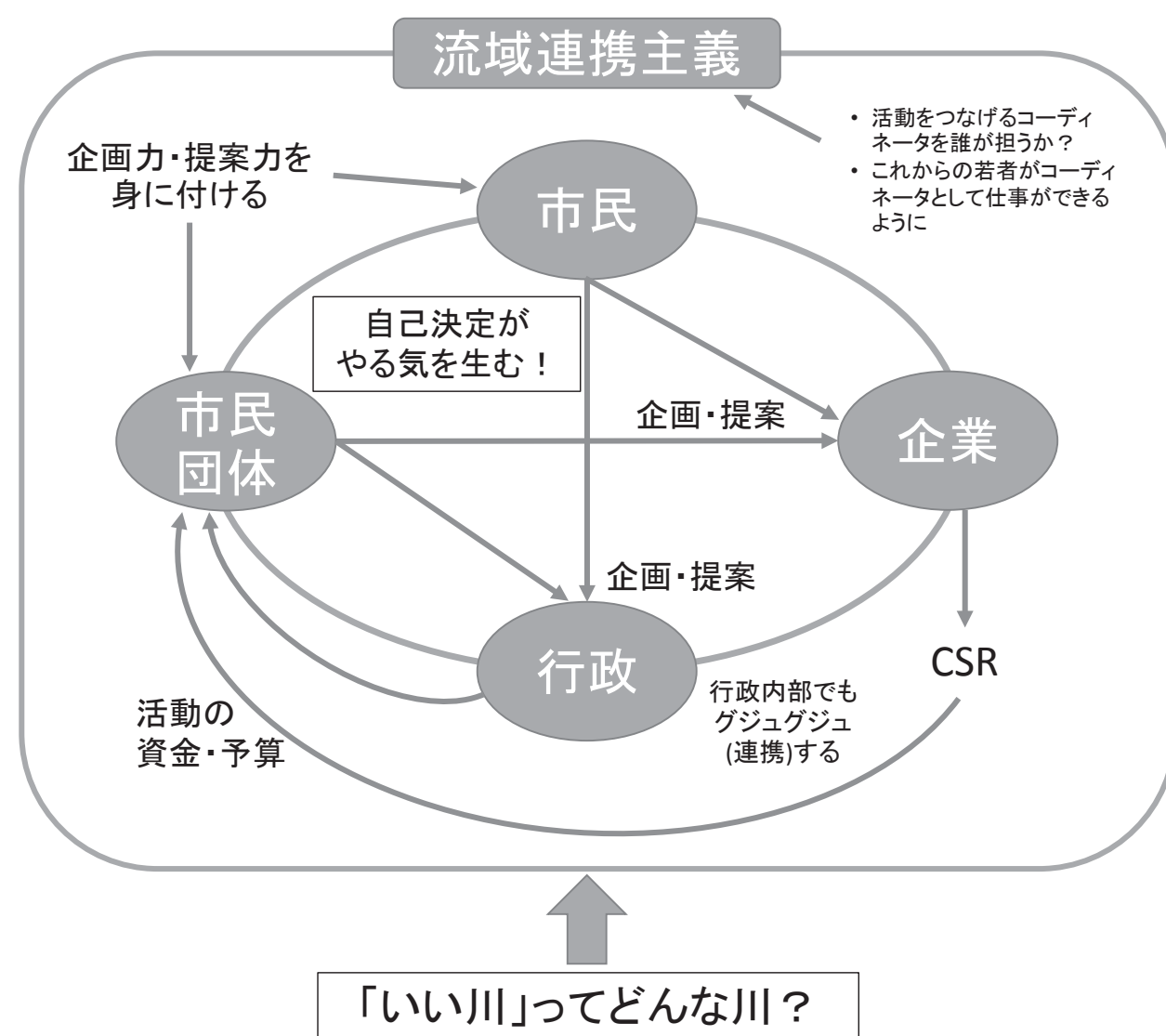
また市民団体が川づくりの活動を展開するうえで、資金の問題は重要な課題です。鶴見川では、トヨタの助成事業などのように、企業のCSR(社会貢献)活動のなかで活動資金を獲得しています。現在では、企業も、単に利益を追い求めるのではなく、社会や環境に対する貢献が求められるなかで、市民団体がしっかりとビジョンをもって、企業に対しても積極的にアプローチしていくことで、環境の整備・維持管理の資金を獲得することもできます。

実際に、「市民工事」として、市民が自らの手で親水空間をつくらうとした場合、様々な制約があります。たとえば、河川と公園との行政区分の違いなどです。行政区分が異なると、担当する行政の部署も異なり、行政内部での調整が必要になってきます。寝屋川の取り組みでは、駅前の親水空間整備において、道路部局や河川部局など、行政内部でも連携をはかりながら活動を進めてきたことがポイントでした。

最終的な課題としてあがったのは、流域連携主義を実現するために、市民、市民団体、行政、企業などをつなぎ、ネットワーク化していくコーディネータをどのようにして育成していくかということです。今後、特に若者が活動のコーディネータをひとつの職能として担っていけるような社会的なしくみや制度を考えていく必要があります。

本分科会には、小学生や高校生も参加してくれました。参加した高校生に分科会の議論の感想をたずねたところ、「難しかったが、川を守っていくうえでは市民の力が重要だということがわかった」と感想を述べてくれました。

ワークショップで共有したことの概念図



分科会のように

第4分科会(文化)

テーマ: 『今、なぜ川と文化なのか』

サブテーマ: ～日本の文化再発見～

講演: 「世界水フォーラムから見た『日本の水文化』

新川 達郎氏(同志社大学大学院総合政策科学研究科教授・政策学部教授)

話題提供: (全国) 田中 保士氏 田倉川と暮らしの会(福井県武生市)

(近畿) 「近木川の汚名返上 一川ガキ文化」 大阪府貝塚市 橋本 夏次氏

コーディネータ(協力者): 寺内 雅晃氏(近畿地方整備局) 福神 邦夫氏(大阪府職員)

コメンテーター(指導) 新川 達郎氏 (同志社大学大学院総合政策科学研究科教授・政策学部教授)

分科会担当者・進行 橋本 夏次氏 記録、機材など 西海 暢展氏 (大阪府職員)

参加人数:20人

1.開催趣旨

川に学ぶ小委員会報告(平成10年6月)によると、川は地域文化を育み、その文化によって河川の景観を形成、また子どもたちにとって人格に基礎を培う原体験の場であったのであるとする。併せてRACの理念は「(4)川に学ぶ体験活動は、人と川が共存する文化・社会を創造します。」とあり、これらの背景から先人が築いてきた川文化に学び、現状(今)を知り、未来へつなぐワークショップを開催します。

◆分科会での心がけ

第1に「参加してよかった」の声が聞こえる分科会にとの思いから、スタッフの心構えの共有を図った。(プログラムに記載) ①傾ける耳 ②学ぶ心 ③本音で語り合い、熱き思いを共有できる「場」を設定。

第2にテーマを押し付けない、議論はそれぞれの活動を背景にしたものとしたい。第3にできるだけ議論に必要な全国的な情報を提供する。(新聞報道、国の方針、社会情勢等)

◆プログラムでの工夫

- ①参加者名簿:どこで活動しているかがわかるように。
- ②名札:発言者がわかるように。
- ③RACの理念、
- ④ポストイットの多用。瞬時に沢山の意見がもらえる。聞き違いがない。背景を読み取れる。

◆分科会に向けてのスタッフコメント・主役は参加者

『ホスト』『キャスト』『ゲスト』の関係性が重要。特に、『キャスト』は地域で様々な活動をされている人材や団体に活躍いただくことが秘訣。… 寺内

・「かつて、河川行政(主に環境)に携わった際、橋本さんをはじめ、多くの方々と出会い、様々な活動や想いを知り、川が繋ぐ緑のすばらしさ・大切さを学ばせていただきました。分科会スタッフの大役は力不足かもしれませんが、がんばりますのでよろしくお願いします。」… 福神

・「昔から川と人の暮らしは密接に関わってきました。その中で培われた文化をどのように将来に繋げていくことができるのか、一緒に考えたいと思います。」よろしく願いいたします。… 西海

2.実施内容

○講演 世界水フォーラムから見た『日本の水文化』

同志社大学大学院総合政策科学研究科教授

政策学部教授 新川 達郎氏

・世界水フォーラムから見た水文化の論点

・水フォーラムと水の未来への課題

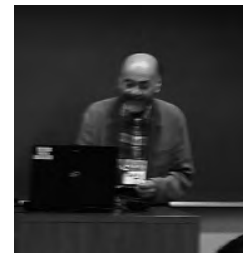
・日本の水文化とその相対化

○話題提供(全国) 田中 保士氏

田倉川と暮らしの会(福井県武生市)

○(近畿)「近木川の汚名返上 一川ガキ文化」 大阪府貝塚市 橋本 夏次氏

近木川に存在する「川ガキ文化」を事例に「今、なぜ、川と文化なのか」について思いの共有を図った。



新川氏



田中氏

【ワークショップまとめ 記録】

RAC(大阪)のテーマ 「今何ができるか」

☆子ども・若者未来の人材へ文化をつなげる
生きがい、愛情、人生の豊かさ
心を育てる
参加メンバーの心意気
自らの活動を通して、明日から、月曜から

自分の心を通して伝えていく
→**ことを確認したWS**

川に行く、近づく、感じる

同志社大学 新川先生のレクチャー

世界水フォーラム

・子ども、若者、女性
・暮らしとの関係

子どもがキーワード
つながり・つなげる

文化がつなげられるか
人と川 まちと川
やはり文化しか人・まち、川をつなげる自然はない
文化とは、人がつくるもの

話題提供者: 田中保士氏

過去 に学ぶ	現在 今を知る	未来 へつなぐ
福井県立博物館:川の生活史から「潤す、運ぶ、育む、壊す、遮る」(年配から、記憶の収集) ・先人たちの暮らしに川を学ぶ	・住民と一緒に活動 ・大学と協働 ・研究所の支援活動 ・違う形の若者の参加 ・60団体の連携 ・「水辺で遊ぼう・学ぼう」 ⇒冊子5万冊	・雨乞いの神事、盆踊りの復活 ・おしゃれな若者の参加: :活動の継続 ⇒川文化として



↑ワークショップ 手前A, 奥側Bグループ

3.分科会の結論、今後の活動方針 全体会議報告(作成 寺内)

(1)はじめに確認した『思い』の共有

多方面で活躍されている参加者とともに、自ら(橋本)の体験を通して『今、なぜ、川と文化なのか』について思いの共有を図った。

『参加者による文化とは何か?共通のキーワード』 生活、生き方、こころ、存在感、供用、未来、つながり

(2)世界水フォーラムに立ち返る文化の原点の確認

同志社大学新川教授に世界子ども水フォーラムの目的に関する基調講演をしていただき、分科会でのワークショップの活性化につながった。

『世界水フォーラム』●子ども、若者、女性 ●暮らしと水の関係

これらを文化がつなげられるか。『人と川』、『まちと川』。文化しか、人・まち・川をつなげられる自然はない。文化とは人がつくるもの。

(3)RACのテーマ『今何ができるか』の確認

世界水フォーラムのフォローアップの後、第4分科会参加者は、RACの取り組みの原点も確認し、『今何ができるか』を、子ども、若者、未来への人材に向けて、自らの活動を通して、各自の思いを共有し、まとめの共有、思いの共有を深めることにつながった。

『参加者メンバーの心意気』●自らの活動を通して明日から、何ができるか。子ども、若者、未来への人材に向けて、生きがいや愛情、人生の豊かさ、心を育てる機会が、川の文化にあることを伝えていく。

(4)分科会成果

分科会では、他者の活動の『共感』、『理解』、『思い』を大切にし、明日から何ができるかを具体的に参加者間で確認することにつながられ、全体発表においても参加者全員に議論の意図を伝えることができた。

『今何ができるか』、そして『今、なぜ、川と文化なのか』という問いかけに対しては、川という自然の中での遊びと学びを通して、未来を担う子ども達の成長につながられる活動を参加者全員が各々の立場で取り組んでいくことの重要性を共有した。

【ワークショップ終了間際の参加者の感想】

①リニヤより早い進行でも、ちゃんとした意見が出る。さすがRAC。②文化を伝える人が少ないコトが問題?

③非常にありがたく、身の廻りを振り返り、勉強ができた。時間がもっと欲しい。④盛りだくさんの内容で、意見交換の時間があつという間でしたが、少しでも言葉にすることができてよかったです。⑤一時期、川が水を流す道具であつた時期がありました。今改めて川との付き合い方を考える時代になったと思います。⑥川文化を意識した活動、プログラム、アイデアをいつも考えていこう。⑦水と文化を楽しむ。⑧水は文化として考えることができました。⑨時間が短かったが、頭の整理ができた。⑩水文化とは?大上段の論議になり、具体的な面で突っ込めなかつたのが残念です。「川をどう暮らしに生かし、楽しむか」もっと、身近な実践を交流したかったです。⑪私たちひとりひとりも内なる川(水)を持っています。本日はたくさんの川と交流できました。これを大きな美しい川に!⑫文化とは、水・人・川と水との『つながり』・歴史(経過)⇒を超えた結果。⑬川(水)の文化について、意見交流できたことは、素晴らしいひと時でした。⑭水文化・水フォーラム、大変おもしろそうですが難しそうです。⑮ワークショップ時間が短い。⑯文化とは……生き方 他との関連性

まとめ

●川という自然の中での遊びと学びを通して、未来を担う子ども達の成長につながられる活動を参加者全員が各々の立場で取り組んでいくことの重要性を共有した。●第4分科会参加者は、RACの取り組みの原点も確認し、『今何ができるか』を、子ども、若者、未来への人材に向けて、自らの活動を通して、各自の思いを共有し、まとめの共有、思いの共有を深めることにつながった。

4.全体を通しての意見(良かった事・印象に残った事・改善が必要と思つた事。

●文化とは、知識・理論で議論するのではなく、それぞれの活動の場からの意見交換ができたこと。

●自分の物差しで対応しないこと。●本音で語り合える場づくりが必要。●文化を伝える人が少ないコトが問題。

第5分科会(連携)

テーマ: 「深めよう 立場を超えた つながり」
 サブテーマ: 川はだれのもの 水はだれのもの
 話題提供者: 山田 大志氏(NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワーク)新 元秀氏(大和信用金庫)
 西田 明氏(国土交通省近畿地方整備局企画部広域企画課)
 北村 美紗樹氏(摂南大学大学院理工学研究科)
 中村 公一氏(おお川水辺クラブ)

コーディネーター: 久保田 洋一氏

分科会担当者: 澤井 健二氏 新里 嘉孝氏 井添 義英氏 東 裕美氏 辰谷 直子氏

参加人数:33人

1.開催趣旨

さまざまに異なる「地域」「世代」「立場」からそれぞれの思いを知り、協調しあって、そこから新たなつながりを見出します。

2.実施内容

(1)リレートーク 16:45～

市民、行政などそれぞれの立場の代表5人から話題提供をしていただきました。

①企業:大和信用金庫 新 元秀氏

「川がきれいになるともうかりませ」

～大和川定期預金を通じた地域の心の活性化に向けて～

平成15年からCSR活動として大和川の清流復活を目ざしている。平成17、18、19年ワースト1だった川が平成27年にはBODの値が2.3mg/ℓまで改善した。「大和川定期預金」は平成18年度から開始。水質の改善により金利が上乘せされる。今まで9回上乘せできている。大和川源流ツアーも実施している。



②行政:近畿地方整備局 西田 明氏

「見えないところで頑張ってます」

～川の市民活動を支える多様な取り組み～

河川レンジャー、河川協力団体など新しい取り組みを積み重ねてきた。道頓堀浄化も進め、川に表を向けた店舗は1店舗から現在は68店舗に増えた。このように現場主義で市民活動を縁の下で力持ちとして支えさせている。



③市民:おお川水辺クラブ 中村 公一氏

「魚が集まれば人も集まる」

～多様な価値を共有し新たな川づくりへ～

淀川の支流大川(旧淀川)でのクリーン活動、生き物調査、Eポート・カヌー体験、川のワークショップ、ボンパーパーバイクなどの取組紹介。都市河川特有の垂直護岸から、生物多様性を育む水辺として進行中の「大阪ふれあいの水辺」づくりでは、多様な視点で人々の集う水辺づくりが重要。



④学生:摂南大学 北村 美紗樹氏

「何が楽しくて川に関わっているのか」

～大学の研究・クラブ活動を市民とともに～

大学のゼミやクラブ活動を通じて淀川に関わるようになった。多くの市民活動を知って協力する中で川への目線が変わった。まずは人の意識を川に向けるため、多くの人や団体と繋がり協力し合って共に進んでいきたい。



⑤NPO:五ヶ瀬川流域ネットワーク 山田 大志氏

清流日本一の川。2年前にこの全国大会を受け入れた。アシ舟、生物調査。川あそび村は、お父さんお母さんに川のよさを知ってもらい取り組み。川のまるごと体験。クリスマスリース作成販売。「イナカdeイカス、イナカ-woイカス」:若者に来てもらう。水質浄化施設。中学生と活動。川の活動で地区の人達の仲が良くなった。皆が川に関わるとよい。



(2)おみあいアンケート

4人ずつのグループに分かれ、おみあいシートに名前・所属、自分の好きな川の名前とイメージを描き、自己紹介と意見交換した後、自薦他薦で思いを発表しました。その一部を紹介します。

- 鳥人間コンテストに参加しており、2020年オリンピックの年に、道頓堀から人力飛行機を飛ばそうと考えている。
- 大和川に自転車道を整備したい。石川とつなげてサイクルラインとしていきたい。
- 大和川は、うなぎも来る。200人のイベントができるくらいきれいになった。遊べる。どうぞ来てください。
- 北海道から来た。昨2015年度受け入れた。釧路川は屈斜路湖から発して蛇行している。昭和40年の食糧難の時に真っすぐにしたが、また蛇行するように戻している。タンチョウヅルやヒゲマとも共生して自然と連携したい。クリーン作戦もして15年連続水質日本一が続く。
- 愛媛県黒瀬川で活動。中山川の源流で汚染されていない自然の川。汚れていないのが当たり前。必死で川をきれいにしたい人の気持ちが分からない。このギャップをどうするか(笑)。など。

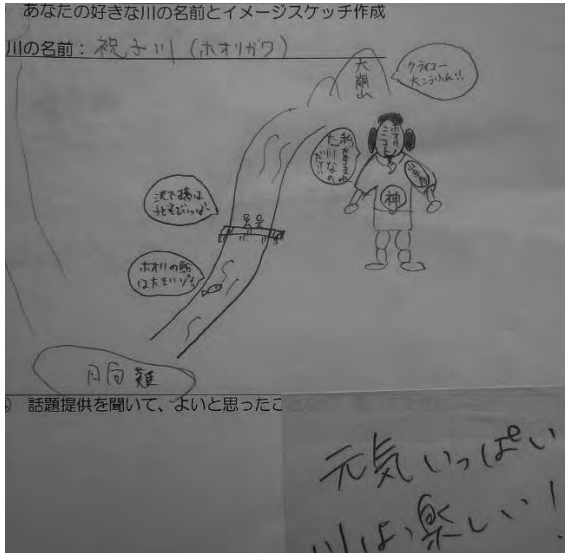
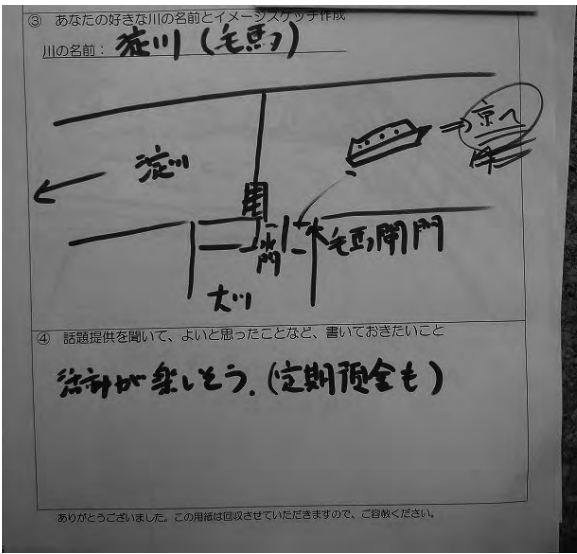
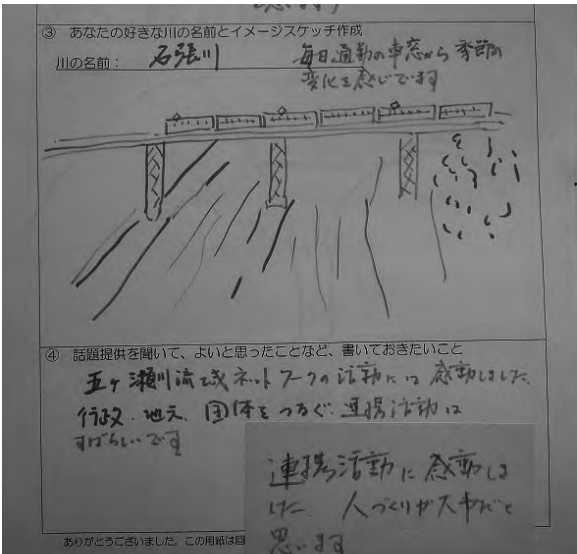
3.分科会の運営などを通じて

- リレートークの内容は濃いものがあり、時間不足の中、結果としてはよかったです。
- 大和信用金庫の独特の地域貢献、国土交通省の取り組みの多様さ、おお川水辺クラブの取り組み、学生の真摯な態度、五ヶ瀬川の報告など、参加者は刺激を受けた様子でした。川の活動をすることで人が仲良くなることや、自分自身が変わっていくことなど、新たな発見もありました。多様な参加者同士の、最低限の情報交換ができました。



- 例えば道頓堀から人力飛行機を飛ばすプロジェクトなども参加者の驚きを誘いました。ぜひ可能性を追求していただきたいです。
- 全体会で言えることですが、大学を会場にしたことは、大学、学生の助けを円滑に借りることができました。よかったと思います。

おみあいアンケート成果物の抜粋



全体会 (17:10～ 551号室)

分科会の結果報告

第1分科会(防災) 柳沼 宣裕氏

地域河川の防災や避難施設の情報授受の課題が挙げられ、防災以外の普段から河川に親しむ機会を大切にしていかなければいけない。

第2分科会(環境) 丸井 晶子氏

環境保全と環境教育についての話題提供があった。環境保全活動を次世代につないでいくことが課題で、運営する側は大変なことが多いが、環境活動を通じて自らが企画をすることから環境保全につながっていくことになる。体験して、川に親しむことを伝えていくということになる。

第3分科会(親水) 高田 知紀氏

水にどう触れ合うか、また、触れられる空間についてテーマにした。

親水をテーマにした寝屋川の事例発表では、市民が徹底的に話し合って親水空間を作っていった。また、鶴見川の事例発表では、行政や市民団体と連携して、子どもたちと川に親しむ活動をしている。

今後、市民が中心となって活動をしていく中でのお金の課題がある。それは、市民活動をしていく上で、助成金に頼るのではなく、若者が仕事をできるようなお金の回し方をしていくことではないか。

第4分科会 寺内 雅晃氏

文化とは人がつくるものである。そのため、文化には参加者全員がそれぞれに思う言葉がある。その思いを子どもや若者に伝えていくには、文化とのつながりが大事であるという議論をした。そして、今回のテーマ「今、私たちに何ができるのか」は、自らの活動を通じて、自分の心を通じて川の文化を伝えるワークショップとなった。

第5分科会 新里 嘉孝氏

企業、行政、市民の連携リレートークで話し合った。大和信用金庫では、大和川の水質が良くなれば金利が上がるという企業のCSR活動。行政の立場からは、河川レンジャー、河川協力団体について、行政の取り組みを話される。市民としては、おおかわ水辺クラブでの活動共有と発信について。また、学生の立場からは、摂南大学エコシビル部での川の活動を通じて色々な人に出会い、連携して思いを形にしているとのこと。

NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワークでは、五ヶ瀬川での河川活動を地域との連携にしている。コーディネーター久保田氏より、川の活動を通じて人がつながっていることが素晴らしいとまとめられた。





大会宣言発表：実行委員長 澤井 健二氏

大会宣言

- 1 最近気象が不安定になり、局地的なゲリラ豪雨をはじめとして、水害に対する危険性がますます増大しています。私たちはそれらの異常現象に対して、情報を共有し、施設整備を図る一方、早期の避難など、減災に努めます。
- 2 河川環境は一時に比べかなり回復してきましたが、まだまだ本来あるべき状況には至っていません。私たちはこの状況を正しくとらえ、外来種対策など、いっそうの環境保全に努めます。
- 3 水辺は大変楽しいところである一方、全国で水難事故が多発しています。私たちは自分たちのまちに、より近づきやすい水辺を整備するとともに、決して無理をせず、水難事故防止に努めます。
- 4 川文化は、川で遊び、体験し、感動するところに原点があります。私たちは今一度、川に学ぶ体験活動協議会が目指してきた、活動の原点に立ち返り、地域とともに川文化の再生に努めます。
- 5 川文化の再生には様々な異なる地域、世代、立場の人々が連携し、協働することが大切です。私たちはそれぞれの地域、立場でできることを実践するとともに、情報を共有し、力を合わせることによって、川文化を次世代につなぎます。

2016年9月3日

第16回川に学ぶ体験活動全国大会in琵琶湖・淀川流域圏



：

閉会式

次回開催地への引き渡し：RAC理事 平山 康弘氏

RAC理事の平山康弘氏から次回開催予定の北九州市紫川のNPO法人 川塾北九州代表理事 内村氏にフラッグが引き渡されました。

閉会挨拶：RAC副代表理事 藤芳 素生氏

皆様ご苦勞様でございました。澤井先生、辻山さん、実行委員会、運営委員会の皆様、本当にありがとうございました。

通常の全国大会は1日目の午後と翌日の午前中の1日かけて実施するのですが、今回の琵琶湖・淀川流域圏の大会は、午後のほぼ半日で、1日分のスケジュールでした。大変賑わしく速いスピードでそのまま纏められました。

分科会の報告や大会宣言を聞いていましたが、この纏める力がすごい。関西人の真面目さを全国に知らしめたと思っています。

先ほどもありましたが、RACリーダーは4,000名を超えて、最初は12団体でしたが、今は106団体と聞いています。確実に、防災、環境、学習等これらの目的に添って、川の安全な活動の為、ライフジャケットの着用を進め、川に親しみ、川に学ぶ活動を続けて行きたいと思っております。

また新川先生も仰っていましたが、川の文化に対するDNAはちゃんと脈々と続いているという話がありました。今回第16回の大会のDNAが、17回の大会にも生きていけばと願います。

冒頭、澤井先生から話がありましたが、以前2000年に大会を行ったという話がありましたが、この大会が第0回目、これが国土交通省の官主導で実施したのは最後でした。

今回の第16回の大会できちんと全国に向けて、琵琶湖・淀川流域圏の底力がわかるだろうと思っております。

最後になりましたけれども、澤井先生、辻山さん、実行委員会、運営委員会、国土交通省、滋賀県、京都府、大阪府、寝屋川市、摂南大学等それぞれの会場をお貸し、様々なご協力を頂いた関係の皆様感謝して、この振り返りの言葉とさせていただきます。

来年、北九州でやりましょうという前に、この後には懇親会もあり、そして明日もエクスカージョンがあります。ご参加の皆様が更に交流を深めて、来年の全国大会を勤しんでやりたく思っており、関係の皆様どうか宜しくご協力お願いいたします。

皆様、本当にありがとうございました。



懇親会(18:00～19:30 11号館11階スカイラウンジ)

司会:摂南大学理工学部 石田 裕子准教授

開宴に先立ち、摂南大学文化会吹奏楽部による演奏があり、続いて、摂南大学学長 八木 紀一郎氏による歓迎の辞を兼ねた乾杯のご発声により、立食パーティが始まりました。

宴の半ばで、守口市在住の松口果歩、莉歩、歩佳3姉妹「いぼっぽクラブ」による歌とダンスがあり、続いて、北海道、東北、関東、中部、九州の各地からスピーチがありました。近畿を代表して、やましろ里山の会 山村武正氏からは、翌日のエクスカージョンの紹介がなされました。

最後に、澤井 健二実行委員長と「いぼっぽクラブ」3姉妹によって、淀川讃歌が歌われ、辻山 正甫運営委員長による万歳三唱で次回の大会の成功を祈念し、宴を閉じました。



プレエクスカーション

テーマ 都市河川で親水活動を進める寝屋川市内水辺めぐり
 サブテーマ 市民と行政の協働で進む川づくり (市民提案・市民工事・市民管理の川づくり)
 開催日時 平成28年9月3日 9時30分～12時05分
 開催場所 寝屋川市内一円、寝屋川、淀川、用水路
 参加人数 41名

内 容

16年前、公募委員61名のみの寝屋川再生ワークショップで「1級河川寝屋川再生プラン」を市民提案し、そのプラン実現のため、委員自らが「ねや川水辺クラブ」を立ち上げ川活動を開始しました。親水空間の工事施工段階では市民工事として参画し、出来上がった後も環境管理業務委託として市民管理を受託しているなど、当地の川活動は、他に類を見ない高度な市民参画を実現しています。そのような形で市民が関わって実現した寝屋川市内水辺整備の現場の見学会です。

14年前、「川の日」ワークショップでグランプリを受賞した際、「川活動の百貨店」と評された寝屋川市における川の市民活動は、プラン実現のための必須条件である市民合意を得るため、河川再生の機運を盛り上げる活動を委員自らが企画し、広く市民に呼びかけて展開したところに特徴があります。舟下り、クリーンリバー、生き物調査、源流探訪ハイキング・間伐、などです。中でも他に例を見ないのが、河川整備を市民がやっけてのけるという市民普請活動であり、これを寝屋川では「市民工事」と呼んでいます。シンポジウムや活動発表会などの場を通じて全国的に広まってきた言葉です。そんな特徴を持った寝屋川市域における川づくりの現場から、1級河川寝屋川再生プランで提案され整備された重点ポイント3箇所、淀川関連の用水路1箇所、そして、淀川で初めての「川の市民活動を背景とした市民提案の水辺づくり」が予定されている点野ワンド・点野砂州を見ていただきました。移動バスの中でも時間いっぱい案内させていただき、また、第3分科会と連動する内容説明とするなどを通じて、参加者には、川づくりにおける行政と市民の関係の在り方、参画の在り方を探ってもらえたかなと思っています。

なお、これらソフト・ハードの親水空間整備活動には、日本水大賞、各種大臣表彰4回、土木学会・都市計画学会などから市民大賞、市民活動の全国発表会のいい川づくりワークショップなどでグランプリ2回、準グランプリ3回、広松伝賞、森清和賞など受賞しています。

見学箇所

寝屋川せせらぎ公園、幸町公園、川勝水辺ひろば

【1級河川寝屋川 3箇所】

茨田樋遺跡水辺公園 【用水路・淀川関連 1箇所】

点野砂州・点野ワンド【淀川 1箇所】



スタッフ

受付 : 立川 亨一氏(ねや川水辺クラブ事務局長)

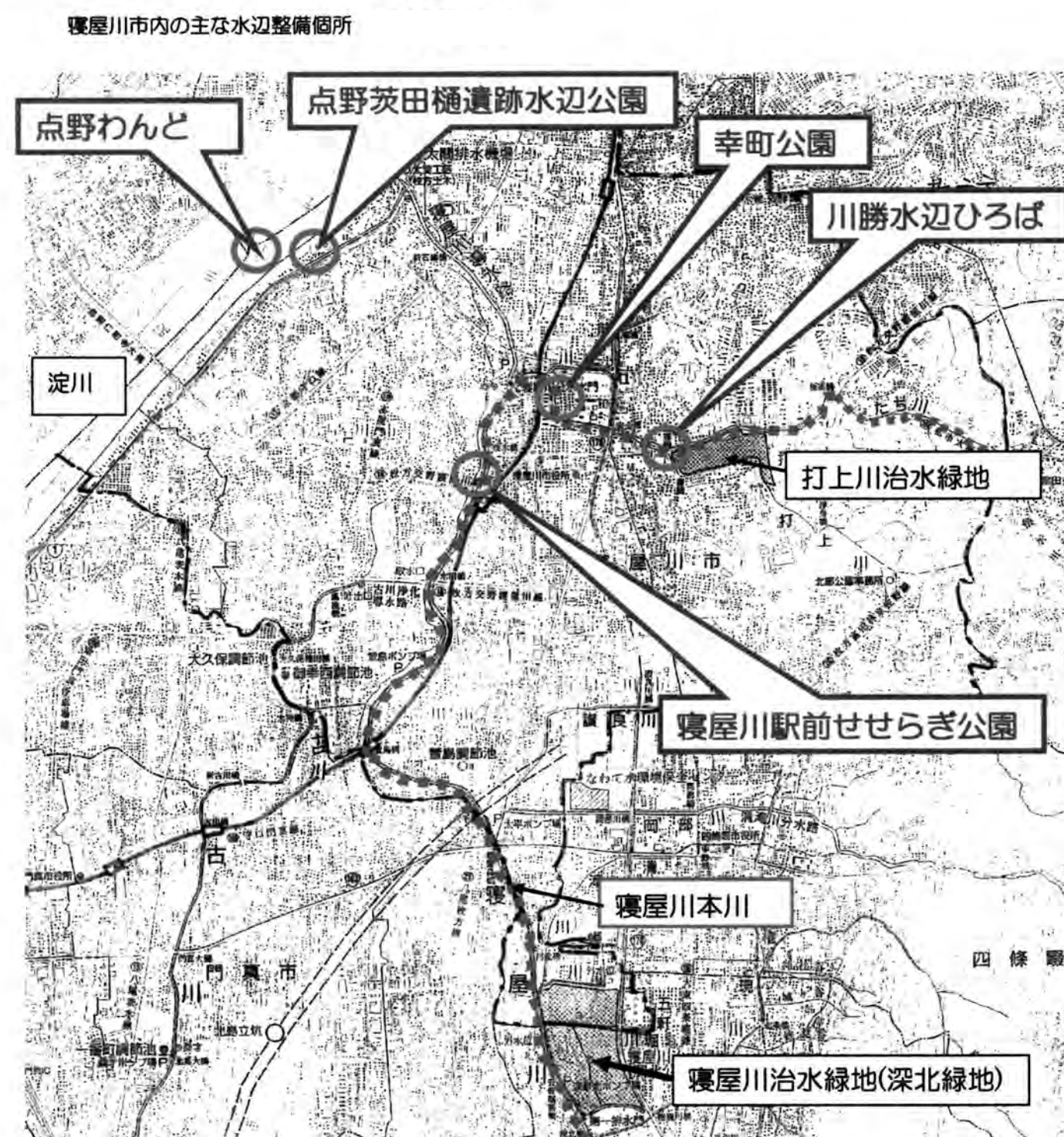
企画・説明: 上田 豪氏(同企画委員長)・竹井 隆英氏(同会長)

案内補助: 郷 敏夫氏(ねや川水クラブ幹事・随伴車運転)、

坂井 佑真氏、渡邊 真也氏(水辺クラブJr)

支援: 寝屋川市 マイクロバス2台提供

バス同乗先導 権永 英明氏(寝屋川市まち建設部水みどり室)



コース

9月3日、全国大会開始前の午前中に実施

9:30 寝屋川市駅西側ロータリー円形ベンチ⇒寝屋川せせらぎ公園⇒10:00駅前交番前発(マイクロバス)⇒
10:15着 幸町公園 発10:30⇒10:40着 川勝水辺ひろば 発10:55⇒着11:15点野砂州・ワンド11:30発⇒着
11:40(堤防)茨田樋遺跡水辺公園⇒発11:55→徒歩(バス)→12:05着 摂南大学

エクスカーション 琵琶湖コース

テーマ: 琵琶湖と人と自然、人と人との絆の大切さを学ぶ
サブテーマ: 船上から近畿1,450万人の命を支える琵琶湖へ

開催日時: 9月4日(日) 9:00～16:30
開催場所: 大津港出港～琵琶湖の環境船megumi船上～沖島～琵琶湖博物館～大津港帰港
参加人数: 59名
企画者: 吉岡 美佐子氏(責任者・全体ガイド、ウォーターステーション琵琶の会)
協力者: 荒井 紀子氏(船中ガイド)、鳥飼 和男氏(沖島ガイド)、長瀬 國男氏、美濃部 進氏
(以上4名ウォーターステーション琵琶の会)、隠岐 純一氏以下 大津よし笛倶楽部有志、
野田 晃弘氏(蒲生野考現倶楽部、記録)
話題提供者: 中村 大輔氏(アイキッズ～エコアイデアキッズびわ湖～、子どもエコクラブ指導者)
辰谷 直子氏(大和川市民ネットワーク)
高田 知紀氏(神戸市立工業高等専門学校都市工学科準教授)
深井 鉄平氏(滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課副主幹)



1.開催趣旨

本エクスカーションでは、環境船で琵琶湖を縦断し、琵琶湖の大きさを実感してもらうと共に、日本で唯一の湖沼の有人島である沖島を訪れ、島の生活に触れて頂きたいと考えました。また、リニューアルした琵琶湖博物館にて琵琶湖の実態を学び、船中では参加者と川(湖)の健全な生態系の保全や子ども達への環境教育について話し合うことで、参加者の今後の活動に生かして頂くことを目的に開催しました。

2.実施内容・スケジュール

(1)大津市・大津港～沖島までの船中(9:00～10:30)

9:00 大津港集合、琵琶湖の環境船megumiに乗船し、大津よし笛クラブのよし笛演奏でお出迎え。

9:10 大津港を出航し、ガイドより滋賀県や琵琶湖の地理的説明があり、比叡山や三上山(近江富士)、浮御堂、琵琶湖大橋など船内から見える景色について、歴史的背景も交えながら説明を聞いて頂きました。この間に、南湖の透明度について白色円盤を水中に沈めて測定する方法で調べた結果、南湖平均よりやや良好な2.5 mと測定されました。

9:55～10:30 活動事例発表・話題提供

中村 大輔氏から「滋賀県の子どもの環境学習について」と題して、滋賀県では全小学5年生を対象に、環境学習船「うみのこ」で1泊2日の宿泊体験を行う、琵琶湖フローティングスクールが32年前から実施されており、琵琶湖での原体験の機会を与えること、環境だけでなく人と豊かに関わる力を養うこと等もねらいとしてあることや、琵琶湖のことを指導できる先生の養成もできていること等の話がありました。次に、子どもエコクラブの団体数や参加者



数が人口当りでの比較では滋賀県が全国で最も多いこと、もっと環境のことを勉強したい子には、「ラムサールびわっこ大使」の制度があり、大使となった子ども達の成長がすばらしいことが、タイでの今年の交流の様子を交えて紹介されました。

辰谷 直子氏から「清流復活を目指して」と題して、大和川市民ネットワークの活動が紹介されました。大和川は水質改善率では日本一の川になりましたが、さらにきれいで安全な大和川を願って、奈良・大阪の市民・団体が連携する大和川市民ネットワークを2008年に結成し、一斉清掃や各団体の定期的な清掃活動の実施だけでなく、「大和川の日」市民のつといや「わたしたちの大和川」講座などの開催の結果、川に人々や子どもが戻りつつあること等、熱っぽく語って頂きました。

高田 知紀氏から「法定外公共物としての加茂湖における環境再生の取り組み」と題して、富栄養化の進んだ佐渡島の加茂湖での再生の取組みを紹介頂きました。加茂湖は河川法や海岸法などに規定されない大きな湖で、牡蠣の養殖が盛んでしたが、ここ10年余りで富栄養化が進み牡蠣が全滅した年もあったことから、市民、専門家、行政、学校が連携して再生に取組み、手頃な場所をモデル地区に選んで先ずゴミ拾いから始め、ヨシ原の再生を実現されました。子ども達が頑張る姿を見て漁師達も頑張る良い循環が見られたとのことでした。

(2) 近江八幡市沖島町・沖島(10:30～13:15)

沖島は源氏の落人7人を祖先とする住民約300人が現在住む島で、沖島小学校には15人の児童が通っているとのこと、島民は漁業と対岸に渡っての農業で生計を立てているとの説明がありました。沖島小学校前の埠頭に接岸、上陸し、以下を実施しました。

10:45～11:15 地引き網体験⇒漁師さんが沈めた網を、皆で引っ張りあげた結果、沢山の魚が網に入ったものの、その99%以上はブルーギルやブラックバスで、在来魚は数匹のニゴロブナとコイ、他にビワヒガイ等が捕れたのみで、改めて琵琶湖の外来魚の繁殖実態をまざまざと見せつけられました。

11:15～11:45 島内散策⇒漁業会館までの道で島民に声をかける参加者も。島外から嫁いで幸せに暮らしているすとの年配の女性の声も聞けました。

11:45～12:30 昼食⇒地元の湖島婦貴(ことぶき)の会の皆さんによる手作りの湖魚料理、特に固有種のビワマス料理やホンモロコの南蛮漬け等を美味しく頂きました。

12:30～13:15 島内散策⇒藤原不比等が建立したと言われる奥津島神社に登り、また、蓮如上人が訪れたといわれる西福寺を通して、島の北西側に出、眼前の広大な琵琶湖と比良の山並みを見ました。

(3) 沖島～烏丸港までの船中(13:15～14:30)

琵琶湖北湖での透明度は、水深の浅い南湖と大きく異なる5.5 mと測定されました(平均やや良)。

遠方に見える多景島(たけしま)や沖の白石、広大な北湖の眺めを楽しんだ後、船内に戻って午前中の3人の話題提供者と参加者との意見交換の場を持ちました。一部ですがご紹介します。ゴミ拾いや河川清掃について①学校では地域の自然を知った上で、さらによくする、或いは維持していくためには清掃活動も必要との考えが子ども達に芽生えることを待っている、②継続が難しくなり勝ちなので、楽しみとセットにする工夫も必要、③ストレス発散目的でゴミ拾いに来ている人もいる、誘い方にも工夫必要、④現場に出た子ども達には問題意識が芽生え、行動に結び着いたので、ゴミ拾いは環境教育の原点、子どもとの関わりについて⑤子ども達に川に入るなど大人が言うが、入ったらだめとは言わずに、どこが危ないか見てやって、何が危ないか教えてやって欲しい、⑥うみのこでの学習を51万

人の子ども達が受けてきたが、その中から琵琶湖のことを考える大人が沢山出てきた、⑦現在の「うみのこ」が2年後に2代目「うみのこ」に更新されるのに合わせ、“つながり”を重視した内容のプログラムを考えている(中村氏の後任担当者の山村氏より)、⑧どのような環境であれ、子どもと一緒に入って現状を知ることが大事、⑨子どもが入ると大人が変わる、一緒に活動が大事、⑩川に入る子ども達が30年位前と比べると増えてきている、その子達が親となったとき次代に伝えて行って欲しい、⑪環境教育という教科は無く、全ての教科の中に環境教育があり、それを総合的に学んでいる、心に関係する部分が大きい。

(4) 草津市・琵琶湖博物館(14:30～15:45)

開館20周年を迎えた琵琶湖博物館は今年水族展示室等一部がリニューアルオープンしました。1時間余りと短い時間でしたが、淡水魚の魚屋の店先が復元されていて、かつては琵琶湖の恵みをより身近に感じることができたのだらうなと思いました。参加者の皆さんにはまたゆっくり見に来て頂きたいものです。

(5) 烏丸港～大津港までの船中(15:45～16:30)

深井 鉄平氏より「滋賀・琵琶湖の取組み」と題して、先ず滋賀県民にとっての琵琶湖について話があり、県民の暮らしで出たものは全て琵琶湖に入るので暮らしと環境の関係が見えやすい構造にあること、それ故、環境保全意識が高く、環境保全活動が盛んとのことでした。次に、昨年9月に施行された「琵琶湖保全再生法」について説明があり、琵琶湖は治水、利水上大切な役割を持ち、未来へと残すべき貴重な自然と資源が多いこと、また、全国の湖沼再生のモデルにもなることから、琵琶湖を「国民的資産」と位置づけ、琵琶湖の再生を図ることで近畿の人達の暮らしに寄与し、自然と共生する社会を実現します、そのために国が基本法を定め県が再生計画を定めますとあります。具体的にやることは基本的には県がこれまでやってきたことの延長ですが、琵琶湖のためにできることを日本中の皆さんに考えて欲しい、とのことでした。

次いで、大津よし笛クラブの皆さんによるよし笛演奏を聴き、最後によし笛の演奏に合わせて「琵琶湖周航の歌」を参加者全員で合唱した後、大津港に帰港、解散しました。皆様ありがとうございました。

3.全体を通しての意見・感想

台風の影響も心配された中、当日は快晴となり無事開催することができ、琵琶湖の素晴らしさを感じて頂けたのではないかと思います。船中での意見交換から、子どもの環境への関心や保全行動への自発的な芽生えを我々が促すことの大切さ、大人と子どもと一緒に活動することの大切さを改めて感じました。



沖島で地引き網参加者と



左より高田氏、中村氏、辰谷氏



バイキング形式の昼食での料理

エクスカーション 京都コース

テーマ「三川合流～宇治川～伏見派流～鴨川・高瀬川」

サブテーマ ～京都の川、その歴史と今を知る～

開催日時 2016年9月4日(日) 9:00～16:30

開催場所 京都府域(八幡市、宇治市、京都市)

参加人数 30名

企画者(役割) 企画・当日スタッフ:鈴木 康久氏、仁枝 洋氏、山村 武正氏

当日スタッフ :東 裕美氏、丸井 晶子氏

協力者(氏名・所属) 新川 良治氏 国土交通省近畿地方整備局淀川ダム統合管理事務所副所長
松岡 徹氏(河川レンジャー 河川財団職員 三栖閘門資料館常駐勤務員)

1.開催趣旨

本コースで廻る淀川、木津川、宇治川、桂川、濠川、鴨川、高瀬川などを知ることは、「千年の都・京都」の 歴史を理解することと言っても過言ではありません。豊臣秀吉が整備した城下町である伏見。伏見と大阪・琵琶湖をつなぐ「宇治川」・「巨椋池」の整備。京の 都と伏見をつなぐために角倉了以が整備した「高瀬川」。これらの河川は舟運のために人の手によって400年前に整備されました。三川合流の地は、「巨椋池」の変遷や、「木津川」・「宇治川」・「桂川」の治水の歴史を知る上で欠かすことができない場所です。都の中心を流れる「鴨川」がどのような役割を持っていたのか。利水(舟運)と治水 の本質を考えることを目的に開催しました。

2.実施内容・スケジュール

(1) 八幡市:三川合流部(背割り堤)9:00～9:40

9:00に京阪八幡駅前に集合。参加者29名でバスに乗車し、背割り堤へ。背割り堤で1名が合流し、計30名で京都コースのスタート。

最初に委員の山村氏から開会のあいさつ。引き続いて、御幸橋の親柱の前で木津川・宇治川・桂川の三川合流地域の歴史に併せて、洪水等への対策や舟運の関係から3つの河川の河道を整備してきたことを、山村氏、仁枝氏、講師をお願いしている巨椋池土地改良区理事(郷土史家)の内田公昭氏、河川レンジャー(郷土史家)の谷口 順彦氏から説明。20分程度、現地散策。

(2) 八幡市から宇治市へ移動(バス中)9:40～10:05

9:40にバスに乗車。バス中で、講師の内田 公昭氏から巨椋池の歴史について説明をいただく。

(3) 宇治市:宇治川 10:05～11:00

10:05に京阪宇治駅。参加者が3チームに分かれ、宇治ボランティアガイドの3名にお願いして、宇治橋の三の間、橋姫、断碑などの説明を受けながら、宇治橋から塔の島まで。この間、お茶や源氏物語、鵜飼など宇治川に関する話を聞く。

塔の島では、国土交通省近畿地方整備局淀川ダム統合管理事務所の新川 良治副所長から天ヶ瀬ダムの洪水時や台風への対応。放水路の工事状況について説明をいただく。

(4) 宇治市から京都市伏見へ移動(バス中)11:00～11:30

11:00にバスに乗車。バス中で、講師の内田 公昭氏から巨椋池の漁村の歴史について、谷口順彦氏から伏見

港の歴史について説明をいただく。

(5) 京都市伏見(昼食) 11:30～12:15

11:30から12:15まで、黄桜カッパカントリーで昼食

(6) 伏見港・三栖閘門 12:15～14:30

12:15から鈴木氏の案内で黄桜カッパカントリーに展示されている河童や伏水(名水)と醸造などの説明。その後、寺田屋を見て伏見十石舟の乗船場。

13:00に15名、13:30に15名の2グループに分かれ、宇治川派流を舟で移動。船内での案内は船頭さん。谷口 順彦氏に伏見港を紹介いただき散策。特別に三栖閘門に上がらせていただき、河川財団の松岡さんから閘門と宇治川などの説明をいただく。その後、資料館を見学。

(7) 京都市伏見から京都市三条まで移動(バス中) 14:30～15:20

14:30にバスに乗車。バス中で、鈴木氏から鴨川などの河川の歴史について説明。

(8) 京都市三条 鴨川・高瀬川 15:20～16:30

15:20から鈴木氏の案内で鴨川河川敷において河川改修や納涼床の説明。鴨川運河(琵琶湖疏水)などの紹介。その後、高瀬川の取水口、一の舟入、瑞泉寺、三条大橋などを廻り、記念写真を撮り終了。京都駅で解散。

3.全体を通しての意見(よかった点・改善すべき点等)。及び参加者や担当者の感想

(なければ感想はなくてもオッケー)

感想:面白かった11、普通4、面白くない0

時間:ちょうどよい11、悪い4

・料理がおいしかった

・盛りだくさんのコースで面白かった

・三栖閘門の後に待ち時間ができてしまっていた

・それぞれの地域でよく知っている方の話を聞けて参考になった

・巨椋池は地図で見えていたが現地を車で通るのとは予想以上に大きく大変参考になった

・また同じコースをゆっくり回ってみたいと思います

・十石舟は往復できると思ったけど片道のみだったのは悲しい

・あらためてわかったこと知り得た知見もあり大変有益な中身であったと思う。ありがとうございました。

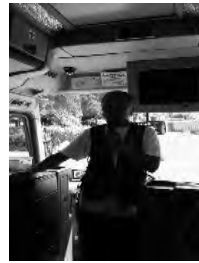
・治水を利用して街ができていることも再認識した

・河川文化というべきものについてこれから勉強していきたいと考えている。

・知らないことをいっぱい知ることができて楽しかった

・案内人の説明もわかりやすく新しい説明が多かったので良かった

・担当の方が詳しい説明をされ、色々な話を聞くことができた



<バスでの説明>



<宇治川:塔の島>



<三川合流:御幸橋>



<伏見:三栖閘門>



<伏見:三栖閘門>



<伏見:十石舟>



<みそそぎ川・鴨川>



<みそそぎ川・鴨川>



<参加者:三条大橋(鴨川)>



<スタッフ写真>

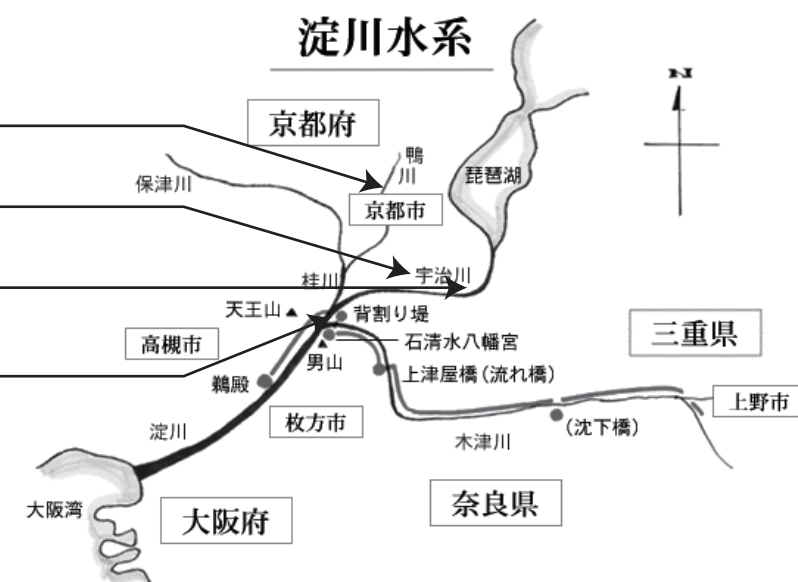
<地図>※実施場所

京都市(三条):鴨川・高瀬川

京都市(伏見):伏見港

宇治市:宇治橋周辺

八幡市(三川合流):背割り堤



エクスカーション 大阪午前Aコース

テーマ 先頭を走り続ける淀川水系

サブテーマ 近代大型河川工事は淀川から始まりました。

河川環境問題は城北ワンド群が原点です。

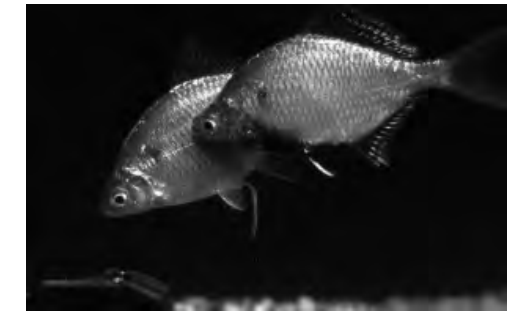
開催日時 2016年9月4日 午前9時から正午

開催場所 淀川城北ワンド群地区 淀川大堰地区

参加人数 28名

企画 木村 俊二郎氏 リバープロジェクト

運営 崎谷 久義氏 自然にみちた水辺づくりプロジェクト代表



イタセンバラの雌雄

1.開催趣旨

国家事業として河川法(1896年)を制定しての大規模河川改修工事はここ淀川から始まりました。城北ワンド群が消滅の危機に直面したとき、近畿の生態学関係者が河川環境改善を提起しました。現在ではイタセンバラをシンボルとして、市民、大学、行政に最近では企業も加わって河川の環境の保全と再生に取り組んでいます。

2.実施内容

I城北ワンド群地区

1) 淀川のワンド群

岡崎 慎一氏 淀川河川事務所 河川環境課長

2) 城北ワンド群での外来種駆除活動

高田 昌彦氏 淀川水系イタセンバラ

保全市民ネットワーク副会長



地引網でワンドの魚を採捕



採捕されたブルーギルの仔魚



解説する高田氏

在来種	34号	35号	総計
フナ属	2	3	5
カネヒラ	12	42	54
イタセンバラ		1	1
オイカワ	3	1	4
モツゴ	9	29	38
ヒガイ類	5	4	9
タモロコ	5	1	6
ヨドゼゼラ	250	172	422
カマツカ	2		2
コウライニゴイ	1		1
スゴモロコ類	1		1
ウキゴリ	8	2	10
シマヒレヨシノボリ	1		1
ヨシノボリ属		1	1
在来種計	299	256	555
国内外来種			
ヌマチチブ	11	11	22
国外外来種			
タイリクバラタナゴ	7	7	14
ブルーギル	999	1011	2010
オオクチバス	3	17	20
国外外来種計	1009	1035	2044
総計	1319	1302	2621

当日ワンドで採捕された魚種と数

Ⅱ淀川大堰地区

3) 新淀川開削と淀川大堰・毛馬閘門と毛馬排水機場



淀川河川事務所 河川環境課長 岡崎 慎一氏

4) 国指定有形重要文化財毛馬第一閘門・毛馬洗堰

自然にみちた水辺づくりプロジェクト 代表 崎谷 久義氏



スタッフを除けば参加者の半数が近畿圏外からの参加者で占めました。前々回、前回の大会実施グループのほか来年度開催の北九州市からのご参加もいただいたほか、国交省、河川財団、RAC本部等、関係の方々にもご参加いただきました。

〔エクスカーショ大阪午前Aコースに寄せられたご意見〕

○ しりべつりバーネット 安藤 正幸氏

河川の利用や文化の歴史などは、淀川と北海道は比較にならないほど違いがあることを痛感し、河川環境の再生・保全の取り組みなど、共通点もいくつかありましたが、都市河川と自然河川との温度差があることがわかりました。

また、淀川の明治以降の改修は新淀川の開削による旧毛馬閘門等の歴史的な遺産を見学し、この河川改修技術が全国に伝授し、大正時代には北海道の釧路川での事例となっていると初めて知ることができました。

市民団体や河川管理者等が協働で、河川の利用・保全と歴史・文化について、現地案内(語りべ)をしていただきましたことに深く感謝申し上げます。

○ NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワーク 土井 裕子氏

大変興味深い内容でした。城北ワンド群での外来種駆除の現場での皆さまの長い間の活動にも頭の下がる思いです。

緩やかな連携のようなのにあれだけ多様な方々が長い期間が続けて参加しておられるのは、参加者それぞれに魅

力があって互いに楽しい人間関係が積み上げられているからだと思いました。淀川の歴史遺産もさすが歴史が違うと感服しました。

○大阪市 ミツ木 伸子氏

胴長を貸していただいて、初めてワンドに入りました。私の父は昔(80年も前ですが)泳いで淀川を渡ったそうですが、私は十三干潟で魚やシジミ採りをした以外、淀川に足をつけるのは初めてでした。

今回、ワンドで地引網によって集められた多くの魚がブルーギルの仔魚だったのには、その多さにびっくりさせられました。このまま大きくなってしまうと、弱い在来種は生き残れないなあと悲しくなりました。治水、利水、環境保護、これらの兼ね合いの難しさをあらためて考えさせられました。

日ごろ、取り組んでおられる方々があって(イタセンバラが)「過保護」と言われても守っていく大切さを知りました。ありがとうございました。

《企画・実施の中から気づいたこと》

自然にみちた水辺づくりプロジェクト 崎谷 久義氏

種の保存と外来動植物問題に対して、市民団体・大学・企業・行政が一体となって方向性を探る。市民や研究者で出来る範囲は自ら行い、河川管理者でしか成せない受け持ち範囲は行政で整備事業化する「イタセンネット」運動。此れまで継続の市民活動パワーも然ることながら、自然環境学識者たちの持続的なモニタリング調査。巡視(啓発)では環境省も加わり、淀川河川事務所はワンド修復に携わる。立場を違える者たちが目的を共にする活動が、このように繰り広げられているのは全国でも稀有なことでしょう。

私自身この市民ネットワークに加わる一員として、全国各地から参加くださった皆様にご案内できたことが嬉しく、また誇りに思います。

リバープロジェクト 木村 俊二郎氏

今回のエクスカーショ参加者の間でも河川における外来動植物の問題に対する理解のレベルはいろいろのようだったが、外来種駆除となると更に理解のレベルは異なってくる。外来種駆除となれば力を発揮するのは市民であることを疑う人はいないだろう。とすれば外来動植物問題に対して全国の事例を共有し、その方向性を探ることが急がれるのではないか。

配布資料 「エクスカーショ大阪Aコース参加者のみなさんへ」、「城北ワンドの概要」、「新淀川開削と淀川大堰」、「平成28年度淀川大堰魚道調査結果」、「よみがえれ、イタセンバラ!〜生物多様性保全の取り組み〜」(日本水大賞HPより)、「淀川河川公園・長柄河畔地区(明治時代の歴史・文化を語り継ぐ建造物)」、「イタセンバラの一生(生活史)」小川力也著、「淀川かわあるき」(淀川ガイドブック編集委員会 廣済堂出版 河川財団提供)、「淀川」、「淀川のワンドにいてみよう」、「淀川の干潟にいてみよう」、「淀川大堰・毛馬水門閘門」、「毛馬排水機場」、「毛馬第一閘門」、「水都大阪フェス2016」、「淀川河川公園利用マップ」

エクスカーション 大阪午前Bコース

テーマ:「魚が集まれば人も集まる」

サブテーマ:都市部における川との共生の新たな試み

開催日時:2016年9月4日9:00

開催場所:大阪ふれあいの水辺～大阪水道発祥碑～毛馬閘門～与謝蕪村の生誕地・句碑

参加人数:33人

企画者:橋本 夏次氏(近畿子どもの水辺ネットワーク)、新里 嘉孝氏(おお川水辺クラブ)

協力者:青木 勇氏(株式会社アオキカヌーワークス)、市川 勝巳氏(福田川クリーンクラブ)、

岡崎 善久氏(淀川愛好会)、松岡 敦子氏(おお川水辺クラブ)、中村 公一氏(おお川水辺クラブ)

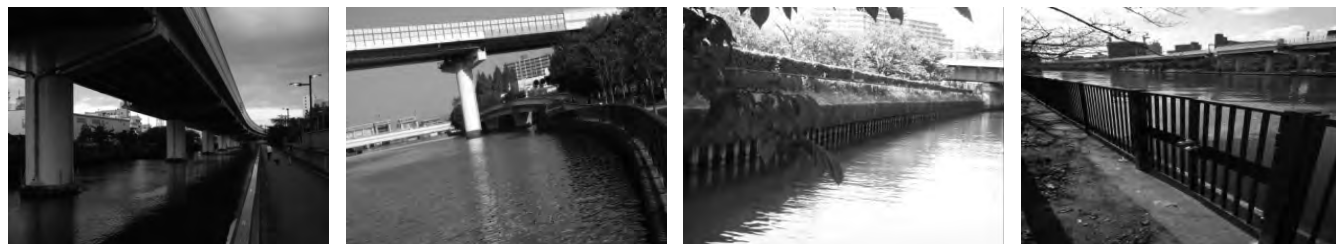
1.開催趣旨

都市部を流れる河川は、戦後の急激な都市化のなかで、治水や利水などを優先した整備が行われてきました。

淀川から分派する大川(旧淀川)では、都市部特有の垂直護岸など「川と人」との関わりについて多くの課題を抱えてきましたが、近年、生物多様性や川本来の姿を取り戻そうとするする声が高まる中、親水空間を創出する事業などが進められています。

中でも、「水都大阪」の魅力づくりとしての「大阪ふれあいの水辺」づくり事業では、大川左岸の毛馬桜之宮公園「貯木場跡」を活用し、市民・NPO団体・行政などのワークショップを通じて、「多様な視点」を取り入れた水辺の整備事業として進められています。

今回は、「大阪ふれあいの水辺」での「カヌー・Eボート体験」や淀川大堰を目指す「水辺ウォーク」などを体感し、都市部における「川との共生」の新たな試みについて考えます。



急速な経済成長の中で、高速道路の橋脚や垂直護岸など変容した都市河川は
子ども達を遠ざけ「近くにあっても遠い川」の存在になってきました。



貯木場跡周辺ではクリーン活動など10年以上に渡って住民やNPO団体などが地道な活動を続けています



ワークショップや生き物調査などを通して「川本来の姿」を取り戻す活動や行政側への提案などが続いています

2.実施内容

①カヌー・Eボート体験

場 所:淀川の支流大川左岸貯木場跡「大阪ふれあいの水辺」

時 間:9:00JR桜ノ宮西口集合～11:00

②水辺ウォーク

場所:大阪ふれあいの水辺～大阪水道発祥碑～毛馬閘門～与謝蕪村の生誕地・句碑

時間:11:00～12:10

③その他:雨天プログラムは大阪ふれあいの水辺対岸にある森林管理局1Fこもれびにて準備

○DVD上映会「水は誰のものか」

○川のワークショップ



▶カヌー・Eボート体験は未明までの不安定な天候が嘘のように晴れ渡る中、予想を超える参加者が集い実施。誰でも簡単に楽しめるよう考案されたEボートは、他府県の参加者ともすぐにうちとけ、川と人、人と人…多くの繋がりや関係性を高めるきっかけに。▶水辺ウォークは、大川左岸～淀川大堰を目指しました。途中、大阪市水道発祥の地で現存する取水桝を見学し、記念碑前で記念撮影。毛馬閘門、与謝蕪村生誕の地など…嘗て淀川の本流として、市民生活や産業を支えてきた大川を、歴史的な視点で見る機会となりました。▶スーツケースを引いての水辺ウォークは参加者にご負担をお掛けし、また、WEBでの受付関係では解釈を巡り多くの課題を残しましたが、最後までご協力に心より感謝申し上げます。▶ありがとうございました(^^) …皆様との出会いに感謝 ●スタッフ一同

○大阪ふれあいの水辺今昔



1961年貯木場



2009年貯木所跡



2016年大阪ふれあいの水辺

○水辺ウォーク主な施設など



エクスカーション 大阪午後コース

テーマ:都市河川の歴史と現状から新たな価値の創造を
サブテーマ:川はだれのもの、水はだれのもの

開催日時: 2016年9月4日(日)12:30受付13:30出港～16:30解散
開催場所: 毛馬出張所(受付)～淀川～大川～土佐堀川～堂島川～東横堀川～道頓堀川
参加人数: 37人(当日最終受付数で途中退席者含む)
企画者: 橋本 夏次氏(近畿子どもの水辺ネットワーク)、新里 嘉孝氏(おお川水辺クラブ)
講師: 新川 達郎氏 同志社大学教授、伴 一郎氏 BAN PR代表取締役
協力者: 市川 勝巳氏(福田川クリンクラブ)、上田 豪氏(ねや川水辺クラブ)

1.開催趣旨

淀川から分派する大川(旧淀川)は、大阪市内中心部を横断し大阪湾へと流れます。都市部特有の垂直護岸は、川と人との関わりについて様々な課題を抱えています。船上から流域の歴史などを探り、下流域における川との共生や今後の川と人との関わりなどについて考えます。

2.実施内容

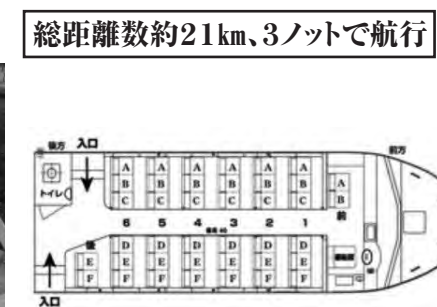
- ①世界初のリチウムイオン電気旅客船『あまのかわ』に乗船し、淀川から大川を下ります。
- 参加費:無 料
- 集合場所:淀川河川事務所 毛馬出張所12:30
- 主なコース
乗船13:30防災船着き場
淀川大堰～大阪市水道局取水塔(城北ワンドを望む)～毛馬閘門～都島橋(水道取水桝跡)～大阪ふれあいの水辺(貯木場跡)～桜宮橋(造幣局)～大阪城港～中之島周遊(中之島図書館、中央公会堂、大阪市役所)～堂島川～土佐堀川～東横堀川(高架橋)～道頓堀川(喰いだおれ) ～湊町リバープレイス16:30解散



案内人新川同志社大学教授



リチウムイオン旅客船 あまのかわ



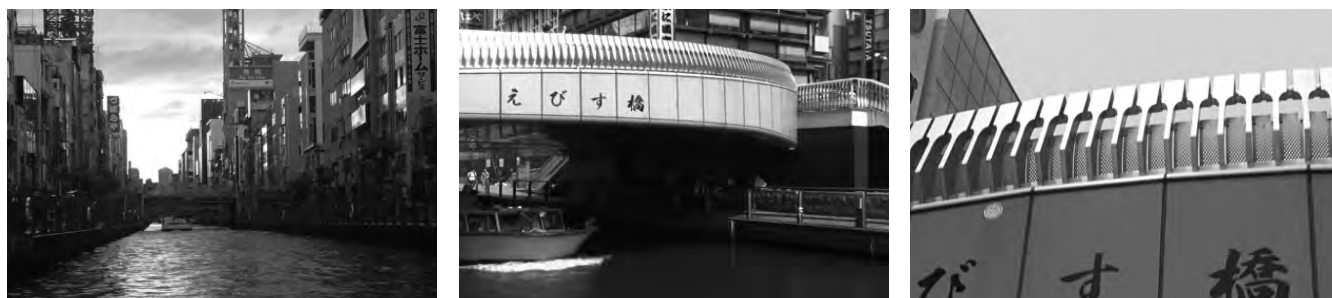
総距離数約21km、3ノットで航行



淀川から大川へ抜ける毛馬閘門



戎さんの福飴のデザインになっている川の標識 江戸時代「浪華の八百八橋」と呼ばれた大阪の現在の橋梁技術は世界最高水準に

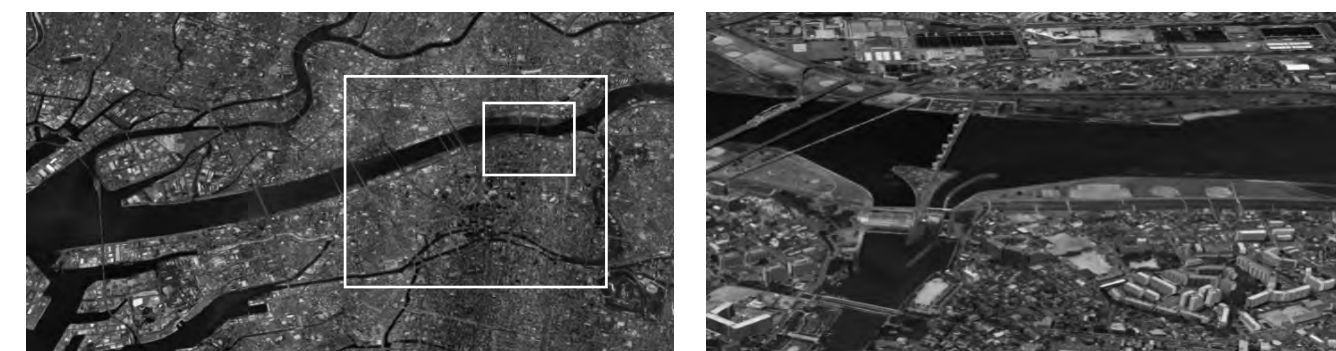
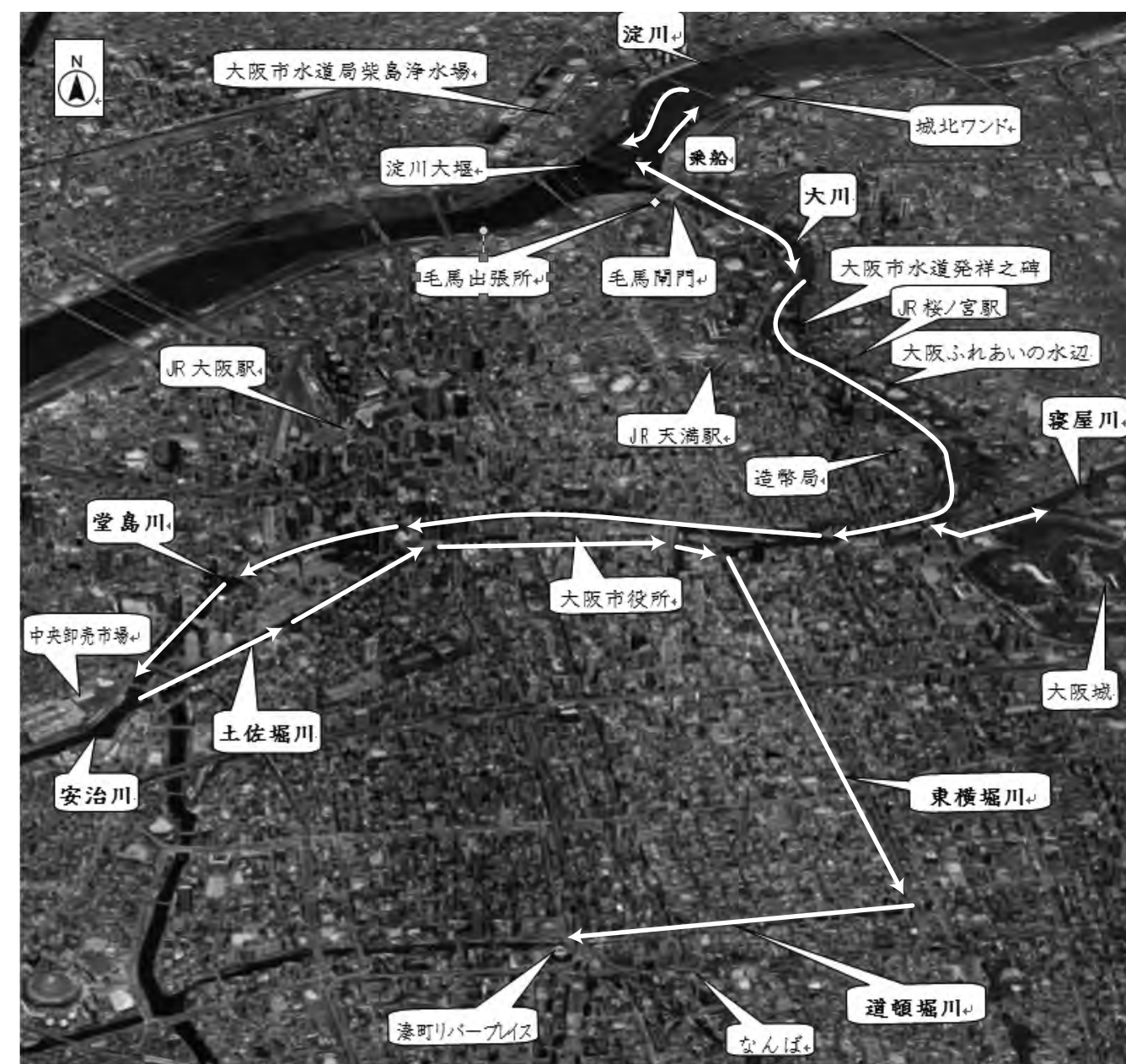


街文化の色濃い道頓堀川、戎橋の橋のらんかんはお好み焼きの「こて」をデザイン。流石大阪こてこてです。



毛馬出張所から歩いて10分、防災船着き場を予定どおり出港。2012年SHIP OF THE YEARに輝いた旅客船「あまのかわ」は、エンジン音やガソリンの臭いもない快適な船旅を提供。▶総合司会の新里氏から資料配布と案内人紹介▶城北ワンド群や柴島浄水場を望みながら案内する新川同志社大学教授は、淀川から取水する大阪市の水道の歴史や最近の動向などを紹介。なかでも水道局の民営化を巡っては、フランスをはじめ、海外では料金高騰につながり、市民が立ち上がり再公営化になった事例が多数あり、持続可能なインフラには住民自治の決定と熟議が必要と述べる▶淀川大堰毛馬閘門を通過し大川へ▶BAN PR伴代表取締役からは、水と共に発展してきた都市大阪を紹介▶江戸期には、東洋のベニスと外国人から評されるほどの都市景観を持っていたが、戦後はモーターリゼーションの波に押され舟運から陸運へ。水都の面影は薄れ、建築物や人々は川に背を向けた▶21世紀に入り水都大阪再生の気運が盛り上がり、水辺のイベントも数多く実施。水の都大阪、今でも大阪の街の中心に水の環状川（線）がある▶舟運が中心だった時代、船から買い物が出来、街は川を中心に発展していた。土佐堀川や堂島川・道頓堀川といった東から西に流れる川が黄昏時から輝きだすと、そこから大人の粋な船遊びが始まったもの。水上からの大阪を楽しんで頂き、水環境問題に対する意識も高めてもらいたい▶制度、政策、歴史、街文化…の紹介を受けながらの船旅は、多くの刺激を受け、非常に贅沢で満足度120%との声多数▶『川は誰のもの、水は誰のもの』…改めて深く考察するきっかけにも▶意見交換や案内人への質問などを受ける時間があればさらに充実したものに▶皆様のご協力に心より感謝申し上げます。▶ありがとうございました(^^)▶皆様との出会いに感謝 ●スタッフ一同

淀川大堰～大阪市水道局取水塔(城北ワンドを望む)～毛馬閘門～都島橋(水道取水跡跡)～大阪ふれあいの水辺(貯木場跡)～桜宮橋(造幣局)～大阪城港～中之島周遊(中之島図書館、中央公会堂、大阪市役所)～堂島川～土佐堀川～東横堀川(高架橋)～道頓堀川(喰いだおれ) 湊町リバープレイス16:30解散



白線は運行経路 ※写真はおお川水辺クラブ新里嘉孝提供。地図はGoogleより出典

第16回川に学ぶ体験活動全国大会の「振り返りと申し送り」等

1.目的:今回実施した、「第16回川に学ぶ体験活動全国大会 in 琵琶湖・淀川流域圏」の実行委員・運営委員は、本年9月3～4日に実施した、全国大会(全体会議・分科会・エクスカーション)について、「振り返りと申し送り」を行い、今大会実施内容の記録と改善点を総括し、今後の大会の運営等への反映と、効率的で、より効果の高い運営や成果が得られる事を目的に、担当委員が協議した。

2.実施月日時:28年10月21日(金)17時～20時

3.参加者:第16回川に学ぶ体験活動全国大会 in 琵琶湖・淀川流域圏の実行委員会委員・運営委員(20名)が参加

4.今全国大会の実施を受け、今後に向けた大会の改善点等:

①開催の時期:今大会は、会場(摂南大学のキャンパス)を利用し会場の経費の節減を図った為、9月上旬の実施となった。(全国の現地の活動が実施中で、大会と重なり、参加者に負担や制限となった可能性があった。)今後は、会場や経費の関係で適切に実施時期の判断が必要である。

②開催期間:今大会は、9月3日(土)13時(開会式)～ 4日(日)16時(エクスカーション現地解散)で実質1.5日間とした。過去の大会で2日間の実施も有ったが、全国の参加者の行き帰りの時間等考慮し、結果的に1.5日としたが少し短かった。

③大会の時間配分:各項目の時間配分は、前例を参考にし、かつ大会で必要な項目を網羅するために、限られた時間を配分化した。

④ 若手指導者の育成:今回摂南大学生の協力(会場設営、案内、資料作成など)を頂きました。運営委員会にも若手の参加を頂いた。今後、本大会の経験を踏まえ、指導者としての活動を期待します。

5.大会組織:下記の組織を立ち上げ検討・協議・決定を行った。事前に準備会と設立委員会の立ち上げをした(H27年10月～)

①実行委員会:承認・決定機関: 各参加組織の代表者で委員26名で構成。2ヶ月毎開催。実態は運営委員と同時開催となった。

②運営委員会:企画・運営検討・運営実施機関:各参加組織から、複数名の担当者で委員を構成し毎月開催。安全管理担当、会計担当、記録担当。

③事務局:参加組織の「近畿子どもの水辺ネットワーク」のメンバーで構成。実行委員会・運営委員会の事務処理(議事次第・会議録等)・会計処理と監査・原稿資料作成・会場の手配・連絡調整を担当

④各分科会・エクスカーション担当グループ:5分科会と6エクスカーションに数名の担当委員を割り振り、細部のプログラム・工程計画などの検討と計画作成・資料の作成・保険等諸手続き・現地との調整を行い、当日の運営も実施し

た。

⑤その他:委員会等で検討をする中で、必要と判明した課題(安全担当・保険契約)

⑥実施内容の項目:

①開会式

②基調講演

③全国活動事例発表(4題)

④分科会(5ワークショップ・纏めの報告)

⑤大会宣言

⑥閉会式(懇親会含む)

⑦エクスカーション(6コース)

⑦その他参加者受付の課題や改善点:

◎参加者の申し込み法(WEB・E-Mail・FAX・TEL)

各システムの特性や、申し込み者の利便性の高い最良の1～2方法に限定すべきである。

特に整理上でFAX・TEL(追加や修正等)は人手の作業が必要で、遅れや誤りのもととなります。

集計と最新状況の把握は開催日が近づけば頻繁に確認する必要があります。その為に集計結果が何時でも即時に得られる事(PCの集計結果など)が重要です。

◎受付(到着受付・分科会受付・エクスカーション受付・発表者受付):受付を項目ごとに設定したが、最初の到着受付を幾つかに分ける必要がある。特に集金の体制をどうするか(1カ所に纏めない)の改善が必要です。

◎分科会:今回は90分のワークショップと全体会議に結果報告として3分を予定したが、全体会議から各分科会の部屋までの往復時間等が必要だった。

更に話題提供や、ワークショップ等に多くの時間がとられ、意見交換や結果の取り纏めの時間が足らなかった。

事前に参加者へアンケートやテーマの周知などし、参加者の議論の方向付けや論点整理をしておけば、分科会の時間の短縮が可能となったと思われる。

しかし分科会毎に報告や課題・テーマを議論し、テーマ毎の今後の方向性をまとめ、全体会議で報告し参加者全員の共有化を図った。

◎エクスカーション:体験型のエクスカーションに重点を置き、さらに開催地ならでの現地の特徴を理解して頂くことが重要です。

今回は、全部で6コース設定し、淀川の上流から下流まで各地で様々な体験や現地の特徴を見て頂く様に工夫したプログラムを組みました。参加された皆さんからは好評価が得られた。

◎大会宣言:各分科会で報告や議論し、分科会のテーマについて、課題や今後の活動の方向性について全体会議で報告した。

澤井実行委員長から、各分科会で取り纏められた課題や、今後の活動方針等を基として、本大会として川に学ぶ関係機関や活動家及び社会に向けて、大会宣言をまとめた。

◎引継ぎ式:今回の北九州大会へ無事引継ぎが出来ました。RAC平山理事から「RAC全国大会のフラッグ」が次回開催予定のNPO法人 川塾北九州代表理事 内村氏に手渡された。

◎懇親会(交流会):全体会議の後に18時～19時30分まで行った。

RAC本部役員の皆様や、全国からの参加された活動家の皆様の交流や情報交換を兼ねて盛大に行われた。会場等の都合で時間が1.5時間内で、時間いっぱい会場内のあちこちで話の輪が出来、活動の苦労話や成果が話し合われた。

又懇親会の雰囲気演出する、摂南大学の吹奏楽団の演奏に始まり、淀川の背高よし等の草木の盛花や参加した三姉妹の子どもの歌声等の演出で、雰囲気が大いに盛り上がり盛況のうちに時間となり、本大会の辻山運営委員長の力強い萬歳三唱で今回の大会の成功を祈念し幕を閉じた。

あとがき:

大会終了後の疲れと・脱力感が大きくアツと言う間に時間が経過し、気が付けばもう数か月が過ぎようとしていました。何日までもむだな時間を過ごして居る訳にも行かず、大会の大切な「成果報告書の作成」や、「河川財団」「近畿建設協会」の助成事業報告書と支援金の精算が残っています。

年度末までには少し期間が有りますが、最後の追い込みをし、取りまとめをしなければなりません。

委員の皆様にも最後の一頑張りを頂き、今大会の実施内容や反省点と、今後の大会の実施に活用できる「申し送り」などもしっかり記録に残すべく心新たにしております。

文責: 辻山運営委員長

第16回川に学ぶ体験活動全国大会 in 琵琶湖・淀川流域圏

実行委員会名簿

役 職	氏 名	所 属 団 体 名
実行委員長	澤井 健二	水辺に学ぶネットワーク代表
副実行委員長	久住 時男	RAC代表理事
	辻山 正甫	近畿子どもの水辺ネットワーク会長
	桑島 偉倫	淀川河川事務所長
	山口 達也	琵琶湖河川事務所長
	西海 暢展	大阪府河川室主査
	岡田 英基	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課長
	大西 道秀	寝屋川市まち建設部長
	小川 芳也	(株)近畿地域づくりセンター
	石田 裕子	摂南大学准教授
	竹井 隆英	ねや川水辺クラブ会長
	吉岡 美佐子	ウォーターステーション琵琶の会代表
	野田 晃弘	蒲生野考現倶楽部副理事長
	鈴木 康久	琵琶湖・淀川流域圏連携交流会副代表幹事
	山村 武正	やましろ里山の会事務局長
	仁枝 洋	桂川流域ネットワーク幹事
	中辻 英克	NPO法人 ビオトープネットワーク京都理事長
	丸井 晶子	琵琶湖・淀川流域圏連携交流会事務局長
	辰谷 直子	大和川市民ネットワーク
	井添 義英	自然にみちた水辺づくりプロジェクト副代表
	市川 勝巳	福田川クリーンクラブ代表
	橋本 夏次	近畿子どもの水辺ネットワーク
	村瀬 りい子	西淀自然文化協会事務長
	東 裕美	NPO法人Civil Collegeむすびらき 理事
	青木 勇	(株)アオキカヌーワークス代表取締役社長
	新里 嘉孝	おお川水辺クラブ代表

運営委員会名簿

役 職	氏 名	所 属 団 体 名
運営委員長	辻山 正甫	近畿子どもの水辺ネットワーク会長
副運営委員長	市川 勝巳	福田川クリーンクラブ代表
副運営委員長	崎谷 久義	自然にみちた水辺づくりプロジェクト代表
会計	村瀬 りい子	西淀自然文化協会事務長
監査役	辰谷 直子	大和川市民ネットワーク
幹事	澤井 健二	水辺に学ぶネットワーク代表 大会実行委員長
幹事	木村 俊二郎	リバープロジェクト代表
幹事	上田 豪	ねや川水辺クラブ企画委員長
幹事	小川 芳也	(株)近畿地域づくりセンター
幹事	野田 晃弘	蒲生野考現倶楽部副理事長
幹事	丸井 晶子	琵琶湖・淀川流域圏連携交流会事務局長
幹事	新里 嘉孝	おお川水辺クラブ代表
幹事	山村 武正	NPO法人やましろ里山の会
	直井 克己	近畿地整河川部河川環境課課長補佐
	晴佐久 浩司	近畿地整河川部河川環境課地域連携係長
	岡崎 慎一	淀川河川事務所河川環境課長
	西海 暢展	大阪府河川室主査
	深井 鉄平	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課 (副主幹)
	嶋田 克幸	寝屋川市まち建設部水・みどり室(河川担当)係長
	藤芳 素生	RAC副代表理事
	平山 康弘	RAC理事
	斎藤 隆	RAC事務局長
	大井 里美	RAC事務局
	仁枝 洋	桂川流域ネットワーク幹事
	北村 美紗樹	摂南大学大学院
	青木 勇	(株)アオキカヌーワークス代表取締役社長
	竹井 隆英	ねや川水辺クラブ会長
	吉岡 美佐子	ウォーターステーション琵琶の会代表
	日下 勤	NPO法人やましろ里山の会
	東 裕美	NPO法人Civil Collegeむすびらき理事
	吉田 静夫	NPO法人・子どもと川とまちのフォーラム副理事長
	柳沼 宣裕	桂川流域ネットワーク幹事
	高田 知紀	神戸市立工業高等専門学校都市工学科准教授
	中西 史尚	近畿子どもの水辺ネットワーク幹事